

第四回 民話 ゆうわ座 — 話に遊び 話を結び 座に集う —
いまここにも開いている民話の入口 — 『食わず女房』 を考える —

目 次

1. 「民話 ゆうわ座」とは	進行 小田嶋 利江	p.3
(記録 小田嶋 利江)		
2. 『食わず女房』とはどんなお話か？	小田嶋 利江	p.5
『口のねえ嫁ご』伊藤正子さん(宮城県登米市迫町・大正十五年生)		
(記録 小田嶋 利江)		
3. みなさんと感想や意見の交換 1		p.8
(記録 島津 信子)		
4. 探訪者の目でとらえた『食わず女房』	話題提供 小野 和子	p.11
(記録 小野 津子)		
5. 民話の中の「異界」	話題提供 島津 信子	p.19
(記録 島津 信子)		
6. 伝承の語り手が語る『食わず女房』の映像を見る		p.22
『飯食ねえ嫁ご』佐藤玲子さん(宮城県栗原市一迫町・昭和六年生)故人		
『飯食ねえ嫁』成田キヌヨさん(青森県十和田市・昭和七年生)		
『口のない嫁ご』永浦誠喜さん(宮城県登米市南方町・明治四十二年生)故人		
(記録 小野 津子・加藤 恵子・小田嶋 利江)		
7. 現代に生きる『食わず女房』	話題提供 小野 和子	p.34
(記録 加藤 恵子)		
8. みなさんと感想や意見の交換 2		p.36
(記録 小田嶋 利江)		

第四回 民話 ゆうわ座 各担当者

〈当日〉	司会進行	小田嶋 利江
	話題提供	小野 和子
	話題提供	島津 信子
	板書	瀬尾 夏美
	会場	小野 津子・白井 聡子・山田 裕子
	撮影・録音	小森 はるか・酒井 耕・長崎 由幹・福原 悠介
	メディアテークスタッフ	清水 チナツ*鈴木 瑠理子
〈記録〉	資料集作成	山田 裕子
	文字起し作成	小田嶋 利江・小野 津子・加藤 恵子・島津 信子・山田 裕子
	梗概作成	小田嶋 利江

* 担当者のうち、瀬尾・小森・酒井・長崎は一般社団法人 NOOK、福原は LLP メディアストラータ所属
清水・鈴木はせんだいメディアテーク所属、その他はすべてみやぎ民話の会会員。

○開会あいさつ

清水 チナツ (せんだいメディアテーク)

みなさん、たいへんお待たせしました。これから「第四回民話ゆうわ座『食わず女房』を考える」を、始めていきたいと思えます。私はせんだいメディアテークの清水と申します。今日みなさんにお集まりいただいているこの場所は、メディアテークが震災以降からずっと、「考えるテーブル」と題して、市民の皆さまとつくってきた対話の場です。昨日で震災から六年が経ちましたが、震災復興、地域社会、表現活動について、みなさんとひざを突き合わせながら、対話の中から、考えていきたいと思って続けてきた場です。

今日、ホストをつとめていただくのが、みやぎ民話の会「民話声の図書室」プロジェクトチームのみなさんです。みやぎ民話の会「民話声の図書室」プロジェクトチームは、2011年の5月くらいからメディアテークと協働で事業を始めました。ですが、みやぎ民話の会さんはそのもともとずっと前から、45年以上、浜辺の町とか山里の村などを訪ねて、ひたすら民話を聞き歩く、聞き訪ねるという活動をなさっています。そのみなさんが、ここメディアテークを訪ねてくださって、震災ということが起こったときに、ここに、これから民話になっていこうとするタネのようなものが生まれてるんじゃないか、そういう声を記録したいっていうことと、これまでにさまざまな伝承の語り手の方たちからお聞きしてきた民話の語りというのを、市民の共有財産として、広くみなさんと分かちあいたいということで、メディアテークを訪ねてきてくださいました。

それからいっしょに伝承の民話の語り手の方たちの映像記録を続けてきまして、現在では五名の語り手の全部で14本のDVDが完成して、メディアテークの2階の映像音響ライブラリーに配架して、みなさんにご覧いただけるようになってます。今年度も目下、制作しているものがあります。そして春には、みなさんにまた、丸森の語り手の方の4本の新しいDVDをお届けできるかなと思っています。

それで今日は、こんなふうにDVDにまとめられた中から、いくつかの語りの映像を参照し、採訪者の目で民話がどういうふうにとらえられるかっていうのを、これから三時間、長いプログラムなんですけど、みなさまといっしょに、対話の中で迫っていかれたらと思っています。今日はどうぞよろしくお願ひいたします。

それで三時間と長いプログラムになりますので、どうぞ間で伸びをしたりとか、あとは奥にお手洗いもございますので、どうぞみなさんの過ごしやすいように過ごしていただければと思います。間で休憩をとるかとらないかは、ちょっと進行次第になるところがありますが、出入り自由の場ですですので、適宜、休憩などって頂いてかまいません。それからメディアテークの事業記録として、映像と写真と音声で記録をさせていただきます。個人が特定できない範囲で撮影はするつもりですが、もしなにか気にかかることなどございましたら、私まで、お声がけいただけたらと思います。

それでは、ここからは、みやぎ民話の会「民話声の図書室」プロジェクトチームのみなさんにバトンタッチをして、これから三時間進めていきたいと思えます。今日はみなさん、どうぞよろしくお願ひします。(拍手)

ではまず小田嶋さんにバトンタッチをします。お願ひします。

1. 「民話 ゆうわ座」とは

司会進行 小田嶋 利江（みやぎ民話の会、「民話 声の図書館」プロジェクトチーム）

みなさま、こんにちは。

みやぎ民話の会の「民話ゆうわ座」に、こんなにたくさんのお客さまが来ていただきまして、ほんとにありがとうございます。これから三時間というとっても長い、長丁場なんですけれども、皆さまと一緒に、充実した時間がすごせたらいいなと思います。

私は、これから司会進行をつとめさせていただきます、みやぎ民話の会の小田嶋利江と申します。それから、全体の記録を担当していただくのが、一般社団法人 NOOK のみなさんで、とっても面倒な作業なんですけど、内容についての板書をしていただくのが、NOOK の瀬尾夏美さんといいます。よろしくお願いします。

（拍手）

いま、メディアテークの清水チナツさんから説明していただいたように、この場はですね、民話についての一つの特定のテーマを取り上げて、みなさんで、その民話について聞いて、考えて、それについて語って、なおかつその語ったことをもとにして、またみなさんで考えて、語って、聞いて、そうゆうふうにしていろんなことを自由に話し合っていていただく場なんです。ですから、どんなことでも、なにか思われたこと、考えられたこと、感じられたことを、自由に出していただいてかまいませんし、出入りも自由ですし、一人一人が、それぞれ、感じたことを話しあっていただければなと思います。

【声をなかだちとして語り継ぐ】 一回目、二回目、三回目までお出でいただいた方は、お話したことではあるんですが、今日のこの集まりの名前について、最初に説明させていただきます。この集まりは、「民話 ゆうわ座 一話に遊び、輪を結び、座に集う一」という名前が付いています。

最初の民話という言葉は、民話にたずさわっている方もいっぱいいらっしゃると思うんですが、一般によく耳にするし、なんとなくわかったような気持ちになっていますけれど、それぞれの人がそれぞれの意味で、いろんな意味で使っていらっやいます。わたしたちがここで「民話」という言葉に込めているのは、ある特定のお話とか物語のことです。どういうお話かといいますと、耳で聞かれて、それが口で伝えられて、そうしたものがまたもう一回耳で聞かれて、そういうふうにして、口から耳へ、耳から口へというふうにして、語り継がれていく、そういうお話です。ですから、そういうお話っていうのは、文字で書かれたお話には限られなくて、もっとさまざまな広い意味とか、複雑な意味とか、そうしたものを含んでいるんじゃないかと思うんですね。声をなかだちとして語り継がれていくような、文字だけのお話とはまた少し違った物語といえると思います。

【民話の深い森】 そうした民話の世界っていうのは、よく深い森にたとえられます。なぜかっていうと、耳で聞かれ口で語り継がれてきた物語ですから、それをえんえんと語り継いできた、非常に多くの何代も前の語り継いできた先祖たち、そのさまざまな思い、現実の苦しみだとか、その中で得た知恵だとか、深い思いや切ない願いなんか、そうしたものが、おそらくたくさんたくさん、一つ一つの話の中に、語りこめられてきたんだと思うんですね。

そのためですか、民話っていわれるお話はほんとうにたくさん種類があって、いろんな味わいがあって、同じ一つのお話であっても、その語り手の方によって、語り口も味わいも違うし、それぞれがこめられた思いもいろいろだったりするんですね。

【探訪者の目が手がかりに】 わたしたちみやぎ民話の会は、そういう山とか川とか海や町で暮らしておられる、そうした民話の語り手お一人お一人を、探して、お訪ねして、それから「どうぞお願いします」とお願

いして、そのお話を聞かせてもらいます。それはとっても楽しくて面白くて、興味深いお話なんですけれども、自分たちだけでそれを楽しんでいるのはもったいないので、記録してみなさんにも知ってもらおうとして、四十年近くそうした記録活動をしてきました。

そういうふうな、お訪ねしてお話を聞くことを、私たちは「採訪」と言っています。採用の採に、訪問の訪を書いて採訪といいます。つまり採訪っていうのは、民話を聞き伝え語り伝えている人々、日々の暮らしを生きてきたお一人お一人をお訪ねして、その暮らしの中でお話を聞かせていただく活動のことなんです。そうした採訪の中でお話を聞いていると、目にしたり耳にしたりするいろいろなことが、聞いたお話、民話のさまざまな姿、顔立ち、そこに語りこめられてきた思いの深みなんかを、わたしたちに考えさせてくれる一つの手がかりになります。

【語り継ぎの流れの端に】 ここでは、そうした採訪者としての体験を入口として、手がかりとして、民話のさまざまな顔だとか、深みだとかを、一人一人が聞いて語って、そんなことを考えるつどいが、今日のこの「民話ゆうわ座」になります。あらためてそのことを考えてみると、長い目で見ると、ここのこのゆうわ座の場も、聞いたり語ったりして伝えていくことの種になる、あるいは未来への芽になるのではないかとふと思えます。次の世代へと伝えられていく可能性があるとしたら、もしそういう、語り継がれてきたずうっと長い流れの一番はしっこにでもこの場所がなれるとしたら、とてもうれしいと思ひまして、そういう願いを込めまして、「話に遊び、輪を結び、座に集う」ということを盛り込んで、「民話 ゆうわ座」という名前をつけました。

「遊び」「結ぶ」「ゆう」ですね、「話」「輪っか」の「わ」をとって「ゆうわ座」としています。そして願わくば、話を語ったり聞いたり考えたりすることで、この場所に集ったみなさんが、それぞれの結びつきが生まれて、同じ一つの座に集えたらいいなと思って、「座」という言葉をつけています。

【表に出てこない『食わず女房』】 今回はその四回目なのですが、一回目は『かちかち山』、二回目は『サルカニ合戦』、三回目は『笠地蔵』について考えてきました。そうした伝承されている民話の姿、採訪で知った姿を手がかりにして、分かっていると思っていたその中に、思わず知らず深い問いかけがひそめられているのではないかと、というようなことを考えてきました。今回の第四回目は、『食わず女房』という話を取り上げます。これまでとは違って、教科書や絵本ではあまり取り上げられてこない、あまり一般的ではないお話なんです。ところがこのお話は、採訪で語り手をお訪ねすると、とてもみなさん、よく覚えてられて、たくさんのお話を聞くことができます。不思議なんです、いままでの記録でも七十話をこえた数になっています。今日はそうしたお話を取り上げたいと思います。

記録 小田嶋 利江(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

2. 『食わず女房』とはどんなお話か？

小田嶋 利江(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

その『食わず女房』、いま言いましたように、あまり一般的ではないので、初めて聞かれる方、触れられる方もいるかと思いますが、最初に『食わず女房』っていうのは、どういうお話なのかっていうのを、実際の語りを聞いてもらって、それで話の骨格を確認してから、進めたいと思います。

取り上げるお話は、伊藤正子さんという優れた語り手の『口のねえ嫁ご』という、『食わず女房』のお話なんです。正子さんは『口のねえ嫁ご』と語ります。正子さんのことについて、最初にちょっとだけみなさ

んに知っていていただきたいんですが。

伊藤正子さんという語り手は、数で言いますと百五十話ほどの、たくさんの本格的な昔話を記憶されている宮城県内でも随一を争う優れた語り手でいらっしゃいます。大正十五年に、宮城県登米市迫町の長沼のほりでお生まれになりました。長沼と申しますと宮城県の方はよくご存知ですが、県の北部の内陸部にありますとっても広い湖なんです。夏は蓮の花でうめつくされるし、冬はガン、カモ、ハクチョウなどの水鳥でうめつくされます。そうした美しいところなんです、土地の方はそうした景色を「なんどうづぐしいこだあ」というんですね。「うつくしい」という言葉が日常語になっていることが、とても素敵だなあと、東京生まれの私は思うんですが…

ともかくそういう美しい風景の中で、初めて私が正子さんにお会いしたのは、1994年でした。最初に正子さんのお話されたのを聞いて、語り口を聞いて、私は、とつとつとしたさり気ない語りなんです、とっても大事に大事に語ってらっしゃるなあという感じを受けました。それはなぜかというのが不思議だったんですが、そのうちに正さんの小さいころの話とか、話を聞いたお母さんの話などを聞いたことで、それがなんとなく胸に落ちてくるようになりました。

正さんにお話を語ったのは実家の母のよしのさんで、よしのさんも優れた語り手で、二百話ほども知ってらっしゃったそうです。当時は電気がなくて、ランプの光の中で、夕飯の後に子どもたちが、「おがあさん、むがす」と言ってねだると、お母さんは、「今日はなにがいいかな」と言って、次々と語ってくれたそうです。よしのさんは子どもたちに語ると同時に、上の子どものお孫さんができるとお孫さんにも語りましたので、正さんは、幼い時からお母さんの語りを聞いて成長し、なおかつお兄さんの子ども、甥っ子さん姪っ子さんの話も、かたわらで、語られるのを聞いて育ちましたので、お嫁に行かれるまで、お母さんの語りを聞き続けられた方なんです。

ですから、昔話が身にしみついて、お嫁に行かれます。やがて正さんも自分で、娘さんたち、お孫さんたちに語り始められるんですが、正さんは常に、そのお母さんの語りをたずさえながら暮らしていらしたのだと思います。

正さんの語りというのは、つまりお母さんから手渡された昔話を、大事に大切に、なにも足さず、なにも引かず、てらいもけれんもなく、そのまますぐにこちらに差し出してくださっているんだなあ、ということなんです。そしてそれを支えてられるのが、語ってくれたお母さんとか、そのまた上の語ってくれた人々や、語り継がれてきたお話の流れへの信頼と愛情だったんだと、それが、大事に大事に語られたということなのだと思います。

さっそくですね、そうした正さんの『食わず女房』のお話、『口のない嫁ご』を、みなさんでまず、見てみましょう。

(1) 『口のねえ嫁ご』

語り 伊藤正子さん（宮城県登米市迫町・大正十五年生まれ）

口のねえ嫁ご

むかあし、むかあし、あるところにね、とっても、とっても、けちんぼうな男の人が居て、^{じえに}銭^{じえに}つこためることばかり考えでる人だったとね。まあ、^{じえに}銭^{じえに}つこためること以外に考えね。

嫁ごもろう年ごろんなったけども、

「嫁ごもらうとなあ、お^{まんまか}飯^{まんまか}食れる。飯^{まんまか}食れば、それだけ^{じえに}銭^{じえに}つこたまんなぐなる」

と思っただ。

「着せるものも、なくてわがんね。嫁ご欲したって、口のねえ嫁ご、居ねえかなあ」

と思っでらと。

毎日そう思っでたら、あるときね、

「こんにちはあ」

って、女おなごの人が来たと。

「おれ、口のねえ女おなごだけっども、嫁ごにしてけえんかあ」

て来たと。

見たれば口がねえ。

「ああ、これはいいなあ。ご飯食はんかねえごったらば、お飯食まんまかねえごったらば、おれ、なんぼ稼かいでも、稼かぎづらある」

と思っただ。

「んだら、入れ」

そして、お方かたっこにしたと。飯まんまは食かんねえし、「これはいいな」と思っで、毎日稼かぎさ行っでらとね。

あるとき、その婿どのね、蔵まがってみたと。そしたら、

「あれ、なんだ、米もつとあったのに、ずっとなくなってるな。いってえ、なんなもんだら。食かねえはずなのに、米なくなってるつことは、いったい、なじよなことしてんだべ」

あるとき、稼かぎさ行っだふりして、隠れで見でらと。

そうしたら、その人が出はったあとにね、その嫁まんまごが蔵さ行っで、米、カマスで一つ担いできたけ。そしたら、それを大釜さ入れて、ざあーざ、撒けて入れて、水を入れて、火いどんどん焚いて、いっばーい、飯まんま炊いたと。それをやきめしに握って、ざあーつと並べたっけどね。

「なんじよすんだべや」

と思っで見でられれば、髪、いままで結っでらの、ぼさんと解いたっけど。そうしたら、頭が二つに割れてね。そごの穴さ、やぎめし、ぼん、ぼん、ぼん、ぼんと入れでやんだと。

「ああれ、口のねえ嫁まんまごで、これはお飯食まんまかねえ、いい嫁まんまごもらったと思ったら…ほんで、米なんぼあつたって、足りねっちゃ」

そごさ出はっていったらとね、そしたら、

「ははあ、見られでしまったな」

そしたら、鬼おに婆ばあになつてね、

「こんだ、お前めどこ食うどお」

って言われたっつ。

「いやあ、これはたいへんだ」

その男、逃げる、逃げる、逃げたど。

沼にヨモギとショウブがあつた。その中さ隠れだど、とつても逃げきれねくなつたから。

そしたら鬼が、わざわざそのそばさ行っでね、

「おれなあ、ショウブとヨモギのそばさ行くと、体か溶かけでしまうんだあ」

あきらめて、その鬼しや婆ばあが去つていったと。

それが、ちょうど五月の五日なんだって。そんで、むかしから、ショウブとヨモギを軒端のきはに挿して、夜にはしょうぶ湯をして、鬼を祓はらったんだと、いまでも。

えんつこもんつこさけしたと

はい、どうでしたでしょうか。『口のねえ嫁ご』というお話。字幕もついていたので、そんなに分かりにくいことはなかったと思いますが、内容について、簡単にここで確認しておこうと思います。お話の骨格のみたいなものを、ここでちょっと確認しておきますね。

まず最初に、ある男が「ご飯を食わない」、つまりご飯を食わないために「口がない」という表現を使うんですが、まさに「口のねえ嫁ご」を探している。

で、望みどおりの女がそこにやってくるんですね。だから嫁にします。

で、嫁はほんとに全く食わないでよく稼ぐんです、働くんです。

男は、最初は喜んでいただけけれども、蔵をちょっと見てみたら、米が減っているの、「あれ」と不思議に思って、「いったいどうゆうこと、おれの留守にしてるんだろう」と思って、隠れてその嫁ごのことを見えています。

そうすると、嫁ごである女はたくさんの米を担いできて、米をご飯に炊いて、こんど握り飯、ヤギメシといっていますが、握り飯にして。こんど頭の髪をばさっと解くと、中に二つに割れた大きな口があって、そこにボン、ボン、ボンボンと、できたたくさんのおにぎりを投げ込んで食べてしまうんですね。

男はそれを見て驚くんですけども、「なんてことをしてたんだ」と思って出ていきます。米がたまると思って口のねえ嫁ごもらったら、頭からご飯をいっぱい食べてたんで、「こんなんじゃお米が貯まらないじゃないか」と思って出ていくんですけども。

見られたことを知って女は、鬼婆に変わって、男を「こんどはお前を食うぞ」と追いかけてきます。

追いかけられた男は、逃げて、逃げて、逃げて、沼のところまで行くと、沼の縁にショウブとヨモギが生えています。ショウブとヨモギっていうのは、すごく香りのいい草で、魔除けになるとも言われているんですが、そのショウブとヨモギの中に男は隠れます。

やってきた鬼婆は、「ヨモギとショウブの中に入ると、おれの身体が溶けてしまうんだ」というふうに言って、あきらめて去っていきます。

その日が、男が助かったその日が、ちょうど五月五日の端午の節句だったんですね。だから、今でもその端午の節句には、ショウブとヨモギを飾って、鬼が来ないように、今でもそれで鬼を祓っている。つまり、鬼は向こうに行ってしまったけど、また来るかもしれないので、鬼をそこで祓っているということなんだと思いますが、それはいまでも、風習として続いています、ということですね。

記録 小田嶋 利江(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

3. みなさんと感想や意見の交換 1

参加者のみなさん

小田嶋—中身については、以上ですけども、初めて聞く方も、もうすでに知っている方もあると思うのですが、この食わず女房というお話について、聞かれてどんな風にお思ったか、感じたか、好きだとか、嫌いだとか、変だとか、何でもいいですので、何か感想や意見でもありましたら、出していたいただければと思いますが、いかがでしょうか。

参加者A（女性）—ありがとうございます。二点あるんですけども、仙台、宮城県在住の方はみなさんご存知だと思いますけれども、「稼ぐ」ということばですが、方言ですよ。「かしえぐ」「労働する」という意味で、語り部の方は使ってらっしゃるかと思うのですが、「かせぐ」「かしえぐ」って、お金を稼ぐではなく、実際に肉体労働するっていうことで作業なんかも含めて「かしえぐ」っていうようなこと言ってるんだと思うんです。そんな「稼ぐ」という意味で何度も使ってらっしゃると思います。

それが一点と、「なぜ、おにぎりにしてから食べるんだろう」っていうこと、みなさん感じてらっしゃると思うんですが、家族ともよく笑いながら話しますが、口の中に、そのまんま入れてしまえばいいのじゃないかと、どの話聞いても、やはりおにぎりにしてるんですね、どうですか。

小田嶋—ありがとうございます。確かにそうですね、お話は全て、おにぎりにして、「やきめし」って言いますけれども、「やきめし」にして、ぽんぽん、ぽんぽんほうり込む。その放り込むところが、お話としておもしろいというところもあるかもしれませんけれども、何故なのか、何故なのでしょうね。確かにそうですね。あと、なにか、はい。

参加者B（女性）—今、おにぎりにして、っていう話ありましたけれども、私は福島県飯舘村出身の95才のおばあさんから、この食わず女房のお話を聞きました。このおばあさんは、小さい頃から山の中で育って、7才になるまで郵便屋さん以外は他人を見たことがなかったっていうような暮らしをされた方なんですけれども、継母にこき使われ、それこそ、嫁に行っても大変苦勞された方なんですけど、とても元気な明るい方でした。その方が、炭焼きをしていた時に、お父さんから聞いたっていうことで、その食わず女房の話を聞かせてくれたんですけれども、その話を語ってくださる時はとってもいい感じでお話してくださって。実はこの時、聞いた話は、おにぎりではなく、へらで自分の頭にご飯を入れてやるっていうお話でした。

ただ、私は、『食わず女房』っていうと、頭の上にすごく大きな口があって、すごいグロテスクな感じがして、怖い話っていうイメージがあったんですけども、この話を仮設住宅にいるおばあさん達に「実はこういう話聞いたんだよ」って聞いて貰ったら、みなさんが、「そんな、飯食わねえで稼げるはずねえべや」って、みんなそうゆうふうにおっしゃるんですね。私の見方って、もしかするとずれてるんじゃないかなって思って、「この話は怖い」ってイメージだけで自分は捉えていたんですけども、それはちよっと違うんじゃないかって思います。

実は、今日、『食わず女房』をここで取り上げてほしいって提案したのは私なんですけれども、ぜひみなさんにいろんなご意見をいただいて、私の見方をもっともっと広げていきたいなって思いますので、どうぞよろしくをお願いします。

小田嶋—ありがとうございます。今、怖いと思っていたっていう、頭に口があって、そこからおにぎりを食べるという姿、確かにお話の中とはいえ、ぎよっとしますよね。ほかにも何か、そういう感じ、印象、いろんな印象をもたれた方、ありましたら…

参加者C（女性）—好きか嫌いかっていうことよりも、どうも、これは私にとって、腑に落ちない話なんですよね。なんでかっていったら、すごく身勝手な男が、「口のない嫁ごがほしい」っていうような、ひどいそういうような男がいて、そういうお嫁さんが来て、ひどい目に遭うんだけど、最後には結局助かりますよね。そういうことってあります？ 昔話って、わりとストンと胸に落ちるような話があるんです

が、これはどうも、私の胸には落ちてこない話なんです。そういつて考えると、不思議なこともたくさんあると思います。たとえば、この人が神さまにお願いしますよね。「口の無い嫁がほしい」って。そして、どこで聞きつけてるかわかんないんだけど、そういう希望した人が、きれいな女の人だっていう話なんかもよくあるんですけど、そういう風に、じゃあ、どこで聞きつけたのかな、とか、そうやって考えると、たくさん腑に落ちないようなところがあるんですよ。だからこの話は、私にとってはどうもよくわかんない、腑に落ちない話なんですわね。

小田嶋—ありがとうございます。確かにねえ。そういう風に感じられるのは分かる気がします。あと、どなたか、言っておきたいことなどありましたら。

参加者D（男性）—ありがとうございました。で、今日、この話を聞いた時ってというのは、この回やるというので、食わず女房の話を思い出しつつ考えた時に、ふと疑問に思ったんですけども、この話、いわゆる形としては、異類婚姻譚といますか、たとえば、『蛇女房』とか、『鶴女房』とか、そういった人間と人間でないものの結婚物語というか、そういったものに分類されるというか、そういう話だと思うんですけども、このお話に限っていうと、あまり正体ははっきりしないっていう。たとえば、今の話だと、山姥であったり、そういった話、名前付けられればいいんですけども、まあ、むしろ、山姥は頭に口無いしなあっていう面もありますし、頭にあれば何かの化身であるとか、神さまであるとか、そういった話が多い割には、この物語だけ、なんでこんなに正体ははっきりしないんだろうっていう。そこがちょっと、大体、大抵の物語は、まあ別れて終わりっていうお話で終わるのに、これは逆に襲いかかれて、逃げ出すっていう不思議な終わり方をするので、ちょっとここだけ他の話とずいぶん違うなあという印象を受けました。以上です。

小田嶋—ありがとうございます。確かに、そうですね。正体については、そのいろんなことは、後のお話し合いの中でも出てくると思いますので、じゃあ、次の方、お願いします。

参加者E（女性・語り手庄司アイ）—座ったままですみません。あの、さきの方は、腑に落ちない話だっておっしゃったんですね。私は、昭和9年生まれです。母から、このお話を、食わず女房ということばで、題で聞いたんじゃないんですね。題なんか、あったかなんだか、わかんないんですけども、「おおまんいち、ぺえろぺろ、おおまんいち、ぺえろぺろ、ぺえろぺろ」っていつて、おにぎりをぼんぼん、ぼんぼん、お手玉のように上に上げて、頭の上の口が、ぱくぱく、そのお釜いっぱいね、米俵一俵のご飯を全部平らげるっていつて、その鬼っていつてのがどういつてものであるか、また、飯を食わないというここの意味。私は子どもなりに腑に落ちないところが一つもなかった。全部、それを受け入れたんですね。さっきの方とは、丸反対ですね。ていつてのは、やはり、その時代にね、ご飯を食べる、女なんか、いっぱいご飯を食べられない、本当に。ふつう、農家っていつていつて、田舎で暮らすときは、ご飯なんかいっぱい食べられる農家なんていつていつてのは、なかったと思います。みんな、お腹をすかせていつていつて。そういう風な嫁の立場であれば、ご飯を食べる時なんかは、本当になんていつていつて、姑さんが見張っていつていつて。自分のお茶碗にご飯も盛れない。そういう時代にね、私たちは生きてきたのでね、とても腑に落ちて、なるほどと思いつたかたちなんですわね。

もうちょっと長くなるんだけどね、今日、ここに来るにあたって、私、四つ下の妹がおりますのでね。妹と隣の家の娘さんと同級生で、うんと仲良しだったの。ところが、あの時代にね、私は給料取りに嫁

に来ただけでも、妹たちは二人とも農家に嫁に行った。それで、手休めに帰って来たときに、私の家に隣の娘さんが来て、姑さんがくっと睨むから、ご飯をお代わりするときは、二膳目は一へらだって。それじゃあ、とても百姓はできないって。それで、鍋の焦げ飯っていうの、みなさん知っていると思いますが、本当にね、暗くなりしなに、釜を洗うのにね、焦げ飯やらなんかを、ほんとに釜にその飯を残して、裏の川に行っ、手でぎぶっ、ぎぶっ、釜に水を入れて、ご飯を口にすすってやった。そういう話は、私、実際に聞いてんのね。

その時ね、私の妹はだまっていたんです。私の妹も農家に行ったのね。「食わず女房の話、今度、仙台であるから行くんだ。隣のしょう子ちゃん、かわいそうだったね。姑さんが見でて、ご飯いっぱい食べられなかったのね」って言ったら、私の妹も農家に行っ、て、「私はあの時、私もそうだったとは言わなかったけども、私もしょう子ちゃんと同じだったよ」って、私に言ったんですね。そしたら、「えーっ」って、私はそのショックがまだとれません。しょう子ちゃんは裏の川でご飯を食べた、釜を洗いながらね。私の妹の家では、裏に川ないのね。そしたら、少し前の畑に堀が流れていて、田んぼから流れて来たその堀の泥水を掬って、それを釜に入れて、私の妹もそのご飯を食べたって。それは、そういう風な目に遭った嫁と姑の関係、それから、昔ご飯が食べられなくて、苦勞した女の人たちのことを知らない、私にはわかんないかもしれないって…私、本当に一週間前に妹に言われて、もうそれで頭いっぱいです。以上です。

小田嶋—本当にありがとうございます。あの『食わず女房』の背後にある事を、はからずも明かしていただいたような気がします。ありがとうございます。そのことについても、これからお話になるんじゃないかなと思います。あと、どなたか、いらっしゃいますか。

参加者F（女性）—さっきの方のお話を聞いて、やっぱり東北の女の方は、貧しい人が多かったなとも思います。このお話は、やっぱり昔から男尊女卑のお話だと思って、私は理解していました。あの、男の人は本当に気ままなんですよ。ご飯を食べない、働いてくれる人を女房にもらいたって、本当に、男の人のわがままだと思って、これを見ました。そして、今、そういう現代、世の中の習いだと思うんですよ。あと、きっと、戒めのためにこういうお話ができたと思うんです。あの、そういうひどいことをした人が、こういう風になるんですよって、そういう風に語られたのかなと思います。

小田嶋—ありがとうございました。本当にいろんな意見を出していただいて、これからもそれが生きてくるんじゃないかと思いますので。

記録 島津 信子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

小田嶋—これから、もう少し、いろいろお話を聞いたりしながら、みなさんの考えをいろいろ出していきたいんですけど、その手がかりになるかもしれませんので、話題提供として、みやぎ民話の会の小野和子さんから、「採訪の中で聞いた、採訪者の視点から見た食わず女房はどんな風に見えるのか」ということを話していただきます。よろしくお願ひします。

4. 採訪者の目でとらえた『食わず女房』

小野 和子 (みやぎ民話の会 「民話声の図書室」プロジェクトチーム)

ご紹介いただいた小野です。今さまざま本当にいい感想、ご意見が出てきて、もう私がここに出てきて何も言わないで、皆さんの話しあいをどんどん進展させていった方がいいんじゃないかなと思うくらいですけど、私も長い間民話をあちこちで聞き歩いてくるという暮らしをしまして、その中であまり表に出てこない話なのに、「食わず女房」が実に沢山語られていることにいつも心うたれて参りました。

今回ここでお話するので、今までどのくらい「食わず女房」を聞いてきたかなあとということを、少し前にこんな表にしてみましたのね。そしたら、こうやって語ってもらった話、それからその方の生年月日とか、住所とか、正体を何ておっしゃったかなんていうことを、こうやってみましたら、やっぱり 80 話くらい、80 人くらいの方から、この話を聞いてきているんですね。

【探訪の場でのつぶやき】そして、今日は3月の奇しくも12日でありまして、昨日はあの大きな震災から6年の節目を迎えていたわけですけども、思い返してこの一覧表を作りながら見ますと、今は殆ど壊滅的な被害を受けたという、石巻の雄勝湾辺りの小さな浜を歩いた日のことを思い出しました、しきりに。そしてそこでも、私は「食わず女房」の話を聞いておりました。その消えていった浜の、消えていったという言い方は間違っておりますけれども、住んでおられる方が三分の二いなくなってしまったという浜の一つであります^{わけはま}分浜というところで、こんな話を本当に立ち話のようにして聞きましたので、それを当時、テープに起こしたものを手書きで、テープをいちいち起こしてきましたので、それをちょっと読ませていただきますね。

先程の伊藤正子さんの語りに比べると非常に簡単な、ま、立ち話のようにして聞いてきたってということもあるんですけど、もういっぺんその分浜で、かつて聞いた『食わず女房』の話をここでちょっと、短いので語らせていただきますとね。

ある婿さんがケチな人でねえ、口のない嫁欲しいって言ってたんだと。口ないと食わねえからね。そんな人ねえべと思ってたが、世話してくれる人いてね、口のない嫁ごが来たんだって。

世話してくれる人がいたらしいんですね。

そうしたっけ、ショウブのときに、婿さんがねえ、ふっと『食べねえ、食べねえ』って言って稼いでいることは不思議だ。どうやってんだべえって、隠れて見てたんだと。したっけえ、頭ん中さ^{おっ}大きな口あったんだと。そこさ、おにぎりうんと握って、その頭ん中の口さ、さっさっさっさっさっさって、突っこんでんだと。

うんとおっかなくなってしまうって、お婿さん思わず、たまげて^{おっ}大きい声出したら、お嫁さんそっち見つけてしまって、そしてお婿さん追っかけてきたんだって。

お婿さんおっかねえから、逃げて逃げて逃げた。そして追っかけられて、逃げて逃げて、ショウブの中さ^{おっ}入って難を逃れたと。

ここで終るんですけども、その後こうおっしゃってんですね。「おとしばなしだねえ」「おとし話って何ですか？」って私は、バカな顔して聞いてんですけども。つまり「五月の節句の云われを語ってる、そういうおとし話だねえ」と。そして「その節には、ショウブとかヨモギとか魔除けに軒さ挿したんだねえ。流しの出口の湿ったどこにショウブなんか生えてんだよ。そのショウブ見てると、おら、このお嫁さんどうなったのかな？っていつも思うんだ」って。このお婆さんの話では、お嫁さんのこと全然触れてないんです。

「男はヨモギ、ショウブで助かったけども」ってんで、「流しの出口の辺りに生えてるショウブを見ると、いつもあの嫁さんどうなったかなと思うんだよ」って。

こうゆう「これはおとしばなしだねえ」とか、「あの嫁さんどうなったかな」と、言ってみれば話とは関係のない、こういう話の周辺で語られるつぶやきのような言葉が、いつも私にその話を理解する糸口を与えてくれたような気がするんですね。そして、その頭の中におおつきな口があったという発想も面白いし、それからその人が男を追っかけてきて、男はヨモギ・ショウブで助かったというような話の形も面白くて、これは、民話の研究者の間でもしばしば取りあげられている話なんですね。

【民話研究における『食わず女房』】 例えば口承文芸学会とか昔話研究会というような、その道の専門の方々の機関誌なんかを広げてみますと、必ず誰かは『食わず女房』を取り上げていると言ってもいいかと思うくらい問題になっております。どんなふうにするかというところが、とらえているかということをちょっと申し上げてみますと、例えば『遠野物語』を書かれた、かの有名な柳田国男さんは『口承文芸史考』という本の中で、こういうふうには『食わず女房』のことを書いておられるんですね。

もともとこの昔話は、頭の頂上に大きな口があったなどという、魚か蛇かは知らぬが、とにかく水の霊の人間に嫁いだ話に属する。今のように妖怪化してしまっただけで、以前の形がもう失われていたものと感ずる。

つまり水の精として、この『食わず女房』の正体は、蛇であったというのが柳田国男さんの考えなんですね。他の書物の中でも、

頭のとっぺんに口があったというのは、おそらく蛇体の変身した姿であろう。

先ほど、どなたかとも言われましたが、蛇が変身した。蛇ってものは、こうあって頭に口があるように見えますね。そんなことで蛇体の変身したものであって、その蛇体は、かつては水の尊ぶべき精霊であったと。その水の精霊であった蛇が男の所に嫁いできた、そういう意味では、異類婚のような話でもあるわけですが、そういう話であったものが、次第に語る人の中で変形してしまっただけで、そして、奇妙な話に落ち込んでしまっているという。柳田国男はこれは零落ということ、「昔話の一つの零落の姿」っていうふうにも書いておられるんですけども。研究者のあいだでは、そんなふうには、この話がもっている不可思議をこう研究していると言ったらいいでしょうか。

【ハレの日の年中行事のいわれ】 また別の研究者はですね、私が分浜で聞いたお婆さんが「この話はおとし話だね」と言ったときに、ヨモギ・ショウブのいわれを語ってるんだよ、ということをおぼろげに言われたように、この話、五月の節句に軒端にヨモギやショウブをさすという年中行事ですね、そのいわばハレの日の年中行事のいわれを語る話であったんじゃないか。そしてヨモギ・ショウブを軒端にさすという言い方は、東日本の方で多く行われて、西日本の方になると、正体が蜘蛛だったということになって、そうしてその蜘蛛が下りてきて、気味の悪い蜘蛛の巣を張らないように、大晦日の夜に、こんどは蜘蛛を祓うために火を焚いて蜘蛛除けの行事にした。

つまり五月節句のいわれとか、大晦日の夜の年中行事とかいうふうには大切な、いわばハレの日の行事のいわれを語るために、作られた話ではないかっていうような方向で、学者たちはこの話を分析したり、それから『食わず女房』の正体は何であったか、突き詰めてみようかと苦労されたり、様々な努力はされております。

【話を引き出す三つの話—(1)キツネ話 (2)豆粉話^{まめこ}】 そういう方はそういう方で面白いと思うんですが、私などは先ほどから言うように採訪者なものですから、一つの話をおぼろげに語ってもらって、その後とか終わりにぼろぼろってなんかいろんなことが言われると、その言われたことが、非常に面白かったり大切だったりして、それを中心に見ていこうとすると、この話はまったく違う光かたをしてくるんですね。

私たちは、先ほど小田嶋さんが、ある日見知らぬ町や村へ行って一軒一軒「昔話覚えてたら、教えてくだ

さい」って行くって言うふうに言いましたが、本当にそうなんです。変な人が来たと思われたり、物売りだと思われたりしながら、それでもお話を聞かせてもらってくるんです。

そういうときに、例えば私ですと、三つの話を語ってくださる方にぶつけてみるんですね。一つの話は何かというと、まずは「あのう、この辺でキツネに化かされたっていうお爺さんかお婆さんはいませんか？」って聞くのね。そうすると一昔前は必ずいるんですよ。「あー、あの局のおんつあんっていう人は、しょっちゅうキツネに化かされる人だった」なんていうふうに、日常から、ひょいとキツネの世界に入っていくながら、そこを糸口にして話が出てくるってこともあるんですよ。

それからキツネがうまくいかなかったときは、次の手を考えるんですね。私が考えてる二番目の手は、ご存じの方もあつかも知れませんが、屁で黄な粉を飛ばしてしまったおじいさんとおばあさんの話、ご存じの方もいるかと思うけど。

おじいさんとおばあさんがいてね、一粒の豆を見つけるんですよ。で、待て待て待て待てって、一粒の豆追っかけてって拾って。そして「おじんつあん、おじんつあん、豆一粒拾った。なじよすべえ」って言うと、おじんつあんも「あー一粒拾ったかあ。えがったなあ」つって、「ほだらば、^{まめご}豆粉にすっぺし」っていうんで、一粒の豆をカラコカラコロと焙烙で炒って、石臼でゴロゴロ挽いて、黄な粉をこしらえたっていうんですね、面白いでしょ。

そして黄な粉こしらえたら、こんどは、「大事な大事な豆の黄な粉、下さおけば猫に^か食れんべし、柵さ入れればネズミに^か食れんべし、ネズミやネコに取られちゃ大変だ。どうすべ。ほだら抱いて寝まっぺし」つってんで、二人で抱いて寝たんです、その^{まめご}豆粉をね。そしたら夜中に、おじんつあんは大っきな屁こいたもんだから、その^{まめご}豆粉が、ぱあんと飛んでいって、おばんつあんの大事なとこにみんなくっついたと。「あー、いだましい、いだましい」つって、おじんつあんそれなめたんだよって、ちょっと艶ばなしみたいな話だけど、非常にこの話はみなさんがどっかで覚えてらっしゃるんですよ。

こんな私が語ったようにではなくても、「あー、粒の^{まめご}豆粉でそういうごどした話なら覚えてる」と言っって、一粒の^{まめご}豆粉の話から、「ああそういえば、あっちのじんつあん、ばんつあんはこんなだった」というような話になっていくんですよ。

【話を引き出す三つの話—(3)食わず女房】 私が三番目に持ってくる話というのが、「食わず女房」なんです。『食わず女房』のときは、「食わず女房知ってますか」なんてことは言いません。「頭^{おっ}に大きな口のあったお嫁さんの話、知ってますか？」つって言うと、「ああ知ってる、知ってる」つって。先ほど正子さんが語ってくださったような整然とした形ではないんですけど、「頭^{おっ}に大きな口あって、そこにやき飯ぼんぼん放りこんだんだよなあ」なんていうふうにして、その話を非常によく覚えておられるんです、その食った場面を、特にですね。

【食えなかった嫁の苦労話】 そして、この話を語った後に、非常に特徴的なのは、先ほどそこに座ってくださった庄司アイさんがおっしゃいましたが、苦労話が連綿と続くんなんです、この話の後には。それは主として嫁であった自分の苦労話。先ほどアイさんは、釜をこうやって飯をこそげて、川でそれを食ったと言うんですけど、私が聞いたあるお婆あさんはそうやって一生懸命こそげて、釜にくっついた飯をへらでとってると、姑さまがきて、「ほら、ここにまだ米あったぞ」とペロッと食ってしまったつって言うんですね。「やって来て横取りされた」つって。それが何十年も前の話なのに、昨日のこつのように悔し涙を浮かべてですね、「なんぼ悔しかったか、あんとき。おへらをぐらひひっくり返して、『ほら、ここにもまだご飯あったべ』つって怒られた」とかですね。

それからあるお婆さんは、「やっぱり女は、ご飯をよそつたり、汁を運んだりいろいろして、とつてもご飯ゆっくり食べてられない。それなのに姑さまが、『ほら、田んぼさ出る時間だぞ』つって言われると、腹減った

まんまでも田んぼさ行がねばなんねがった。腹減って腹減って、田の水すすりすすり、田打^うったもんだじえ」なんて言われると、聞いてると涙が出てきちゃうんです、こっちもね。田の水をすすりながら、田を打つという重労働、稼いだ人たちですね。そういう人たちの苦労話が連綿と出てくるんです。

後で映像で映して頂きますが、一迫町の佐藤玲子さんの『食わず女房』なんかもまさにそのことをずばり語ってるし、玲子さんに『食わず女房』聞きに行くと、半分以上は、どんなに腹減ったかという苦労話になってくるんです。とても裕福な農家に嫁がれたんですが、「やっぱり嫁の立場ではなかなか二膳目が出せなかった。食うとじーっと睨まれたあの恐ろしさは忘れられない」とかですね。

【苦労の中で生まれる話—キュウリと真綿】 でもね、そんな苦労の中でもですよ、話みたいに関心があるんですよ。

あるお嫁さんはね、お姑さんと一緒に布団作ってたんですって。今布団作る人なんかいないかもしれませんが、昔は布団は家で作ってたのね。布団の皮にする布を広げて、その上に真綿を敷いて、そして綿を載せて、そしてまた真綿を敷いて、くると包むんで、大抵二人でやるんですよ、一人じゃなかなかできないから。

お姑さんと一緒に布団を作ってたっていうんですね。そしたら隣のおぼんつあんが来て、「おらほで、ぼた餅ついたから、お茶っこのみに来い」なんて来たって。「あらあ、ぼた餅か」と思って、自分も行きたかったけど、姑さんは「んじゃあ、おら行ってくるから。おめえここで布団つくってろ」って言ったって言うんですね。

それでお嫁さんは、ポツンととり残されて、一所懸命布団作りしてたって。んでもね、そのとき言われたことは忘れられないんですけども、「食うなって言われると卑しくなんだよな。周りに人が居ないと思うと、何でもかんでも食ってみたくなるんだよ」って言うんですね。「腹減ってなくても、食うな、食うなって言われ続けると、人が周りにいないと思うと、なんか食いたくなる」って。

そのときも食いたくなかったので、裏のきゅうり畑まで走ってって、きゅうりもいで、がりがりがりがりきゅうり食ったんだそうです。そして家に帰ってきて、布団作ってるようなふりして、ちゃあんとしたら、そこへまたお姑さんが戻ってきたって。そしてね、お姑さんが言うには、ぼーんと真綿を投げてよこしたんですって。わかるかな、ちょと難しいけど、真綿って背中にこうやって背負っておいては、ちょっとずつ下しては使ってるんですよ。真綿をお嫁さんは、背中に背負ってたの忘れて、きゅうり畑行ったら、きゅうり畑で真綿が引っかかって置いてきちゃったのね。

そしたらね、昔嫁だったお姑さんはちゃんとわかってるんですね。ちゃんと裏を帰ってきて、きゅうり畑で真綿拾って来て、「ほら、おらほのきゅうり畑には、真綿なってるぞ」って、こう言って投げてよこしたって言うんですよ。「あらあーと思って、心臓もう、ドキドキドキドキした、あんときのことは忘れらんねえ」って、話すと笑い話ですけども。やっぱり食えなかった苦しみの中でも、こんなある意味では逞しい面白い話が生まれてきて、そしてそれを涙ながらにも語っておられる。

【食わず女房に寄せる共感—現実を生き抜くための力】 そういうふうに関心がある苦労話が、ずーっと『食わず女房』の話の後に出てくることに、私は気がつきました。そしてその苦労話を書き連ねていくと、もうきりがなくらい。そしてその苦労話から、この『食わず女房』を眺めなおしてみますと、違う様相がやっぱり見えて参ります。

これは、栗原郡の志波姫っていうところに採訪に行ったときのことでした。夏の暑い日でしたけども、その日もあまり話が聞けないまま、あちこち歩いてまして、ひょいと見たらね、集会所に年配の60代70代くらいの方が5、6人いらして、机の上には大正琴が置いてあったんですね。こわごわ覗いてみたんですよ。そしたらね、本当に運が良かったというか、その日は集会所で大正琴を、近くの大きい町の築館からお師匠さんが来て教えてくださることになってたんで、みんなでこうやって待ってたら、築館のお師匠さんが、さっ

ぱり来ないから電話かけたら、「今日そっち行くの忘れちゃってた」ということで、ぽかっと空いた時間になって、皆さんは大正琴の練習もできないし、困ってるときに私たちがふらあっと行ったもので、そこにいらした方にとっても、まあいい話相手ができた。私たちにとっては、そんな時間にですね、4人か5人いらしたんですけど、もう嬉しくなっちゃって、そしてそこで話を聞かせてもらいました。でも、大抵は忘れた、忘れたって言って、きっちり頭としっぽがあるような話ってなかなか聞けないんです。

さっき正子さんが語られたような話は聞けなくて、こっちだけだったり、断片的だったりするんですが、そこでも『食わず女房』の話が出て参りました。

そうしたら、みんなほんとに勢いづいちゃってですね。そして、嫁のときに食えなかった悔しさをまた、連綿と一人ずつ語り出して、「おめえどこもそうだったのかよ。おめえどこなんか、裕福な百姓だったのに」なんて言うと、「いやあ、裕福関係ねえの。お姑さんいたら、お櫃ぎっちりぎってるから、茶碗なんか出せねえのっしや」なんてそういう話になってきて。そして「話は頭からしっぽまで順繰りには覚えていないけれども」って言いながら、この女房が、握り飯を握って、頭にポンポン放り込むところだけは、みんなよく覚えてられるんですね。

さっき、おへらで入れた人があるって言ってくれた人もおられますが、大部分はにぎり飯に握って、なんか遊びでもするように、「あやこつぎみてえにな」って言われるんです。お手玉つくようにして、にぎり飯を頭の口に放り込んだって。ここでいつもお手玉が出てくるんです。

後でまた映像でも見て頂きますけれども、その方たちもみんな「お手玉つきのようにして」って言うから、この『食わず女房』が握り飯を頭に放り込んだということは、一種の遊びであったのかもしれないんです。腹を満たすということと同時にですね、それを超越するように、遊びのようにお手玉のように放り込む。そしてそのときにですね、いつもですね、「おまんちちべろべろ、おまんちちべろべろ」「ほら食え、もっと食え。亭主のいねえ間に、もっと食え、全部食え。ほら食え、ほら食え」って、そこだけ合唱みたいになってくるんですね。そしてみんな「ほら食え、ほら食え」って、その食わず女房がお握りを放り込むことに共感するように、そこを実に勢いよく元気に語られるんですよ。

それは、食えなかった自分たちをではなくて、家じゅうの米を大釜いっぱい炊いて、握り飯ずら一つと並べて、ぼんぼんぼんぼん放り込んだその姿に共感してるというか、自分もそういうこと一回やってみたかったっていうような感じで、そこには、非常に力強い歌や文句が入るのが常なんです。面白いでしょう。そして、そこを語るときは、うんと元気が出るのみんな。「あー」とその姿を見ながら、私は思いました。

『食わず女房』の話は、別に蛇だったかどうかだったかってことを抜きにして、こうやって食えなかった女たちが、その苦しみをテコにしながら、語り継いできたし、こういう話があることで、日常を頑張って生き抜くことができた。そのことに共感して語り続けられてきたんだなあという気が、『食わず女房』を聞くたびに思うんです。ですから非常に沢山の人が、これをひそひそと語りながら、どこかで自分の心を晴らしていたのかも知れない。

民話はときにそういう働きもするんですね。そういう民話があることで、現実を生き抜く力になっていくことがあるんですよ。食えなかった女房がそうやって食った。そのすさまじい姿さえ共感すべきものだというように、食えなかった女たちは語っているわけですね。

【食わない女房を求める男】 そして先ほども、どなたかから出てきたと思うんですが、私も初めてこの話を聞いたときに、「なんて男に都合のいい話なんだろう」って思ったんですね。「物食わないで稼ぐ嫁欲しい」だなんて、すぐ隣の升沢ではね、面白いんだけど、「物食わねで稼いで、なお糞^{くそ}だけどっさり垂れる嫁が欲しい」と言うんです。つまり人糞は大事な肥料でしたからね「食わせなくても、糞^{くそ}だけはたれる女が欲しい」っていう、こんな言い方で『食わず女房』が始まるのもあるんですよ。切実ですね。そして、でも何故かそ

ういう人が来るんですね。そこへひょいとね、自分から押しかけてくるんですよ。引っ張りこまれたんじゃないで、頼まれたわけでもないのに、自分からそこへ来る。これもまた異類婚の形といわれる姿の一つかもしれないませんが、自分から蛇でも鶴でも自分から押しかけて女房になってきますので、異類婚の面影がこういうところにもある、なんていう考え方も学者たちはしておられます。

そうやって、食わないで稼がせておいて、それが物食うとわかったら、男は今度は追い出そうとするわけですよ。そして挙句の果てに、「ヨモギ・ショウブを軒端に挿して、そういう悪い女が来ないように男の魔よけにしたんだよ」なんて言われると、「なんて男に都合のいい話なんだろう」って思っちゃいますよね。「こんな話がまかり通ってるっていいのかしら」なんて、私も憤慨したりもしました。

【農家の次三男—オンジの境遇】 でもね、後で見ていただく映像で、そういうふうにはっきり言ってくださる方がありますが、「むがすあつとごに、オンジいだどや」。オンジっていうのは、農家の次三男のことなんです。そして農家の次三男の暮らしの厳しさ大変さは、また民話を聞く道中でもよく聞くことなんです。長男だった人は僅かばかりの家付きの田畑^{でんぼた}を受け継ぐことができるけれども、次男、三男になりますと、その田畑もないから、自分で腰までぬかるような田を耕したり、それから岩がゴロゴロするような山を開墾して田にしたり、そうやって苦勞しいしい、家を出て、小さな田畑^{でんぼた}を自分の手で、本当に命がけで少しずつ作っていった。それが農家の次三男の運命だったということをよく聞きます。

宮城県では、おんちゃとか、おんつあまとかいって、おんつあま株と言う言葉もあって、次三男は長男とは一線を引いて捉えられている。

そして、『食わず女房』の男もいつも一人なんです。家族の中で暮らした男ではなくて、「男がいたど。ケチなおとこでなあ、飯食ねで稼ぐ嫁ごいねえがさがしてだどう」っていうふうには、語りはじめられるその男は、実は農家の次三男の苦しい境遇に置かれていた人であったってということ。このような言葉ではないですが、民話は暗に、「昔、男いたど」と家族は一人も出てこないわけなんです。出てきたとしても、隣のおばあさんだったりするんです。いい男が一人で暮らしているということは、農家の次三男の自立しなければならぬ家庭の中の姿だったと考えてもいいかと思うんですね。そんなふうには思ってたらず、後で見ていただく映像の中ではっきりと「農家のオンジいたど」「次三男がいたど」と語ってくださる方の語りにも出会って、この事がいっそう明確になってくるわけです。

そうすると自立しなきゃならなかった男が、その為には「飯くわない嫁が欲しい」というのは、切実な願望だったと思います、この男のですね。

【桶職人と桶】 そしてそうやって田畑を少しずつ手に入れていく人もいれば、ちょっと才能のある人たちは、手に職をつけていったっていうんです。他所へ、町へ出ていって、たとへば大工さんに弟子入りしたりしながら、手に職をつけていく中で、大工さんにはいろいろあるんだけど、桶職人というのがまた特別な地位にあった。

私たち日本人の中で桶という物の存在は、非常に大切な存在だったということ、ちょっと皆さん、思い出していただければいいと思います。今は無いかもしれませんが、例えば、赤ん坊として生まれたときはタライです。タライも桶ですよ。金ダライというのが出てくるのはずっと後ですからね。それから、死んで行く時は棺桶ですよ。やっぱり桶なんですよ。ですから桶職人というものは、非常に大切な仕事であったけれども、桶職人になって暮らすということは、また次三男の大変な苦勞でもあった。

で、竹のタガを背中にしょって村々を歩いて、そして宿で泊めてもらっては木を切ってきて桶を作って、タガをかけて底をつけていく。味噌も酒も漬物も桶なくしては一昔前の暮らしは成り立っていかなかった。その桶を作っている。『食わず女房』の話の中に、最初から「桶職人がいてな」って語られてるのもあるんですが、そういうふうには語られなかったとしても、桶がでてくるんですよ。桶の中に女房を押し込んで背負っ

てったり、反対に桶の中に男を放り込んで背負ってたりしながらのように、桶というのが本当に、光と影のように話を彩っています。

【断片の話、影の話を覗き眼鏡にして】 そうすると、何でもないように語られてるこの話が含まれているものの深さを、思わずにはいられないんです。ですからこの話は、「そういう女性たちの苦勞によって、今日まで語られてきたんじゃないかなあ」という気がするんですね。

先ほど志波姫の話をしました、その志波姫で集まっていた方たちはですね、「おらほでは、食わないで稼いだ女房、頭に口があった女房のことを、『八釜飯』って呼んでたんだよ、八つの釜の飯って言う名前をつけてた。八釜飯って一種の妖怪か怪物みたいなのがやって来たといふように、そこに名前を付けたというふうに言われました。

またそこにいたべつのは、「おらほでは『山姥金時』って言ったんだよ」、金時の男みたいな、力もあるし食うも食うというので、『山姥金時』って言ったんだよ」って、おっしゃっている方もいました。不思議な名前をこのときに聞きました。

このときには、先ほど正子さんが語ってくださったように、順々と物語が展開していくというよりは断片的だったんです、みんな。それでも、断片的だけれども、この話が生きていたんですね。もし断片的なままと私が記録して研究してる方やなんかに渡しても、「これはちょっと中途半端な話だし、忘れてるところも多いし、変に変形してるから」と言って捨てられるかもしれない話だと思うんですよ。そして、断片化してしまったことを惜しむ研究者もおられます。「昔はもっと完成したいいい話だったのに、こんなに断片みたいになってしまったのは、やはり時代の中で、民話は衰亡、衰微していく道筋の中にあっただか」なんて言われる方もありますけれども、私はそういう捉え方では無くて、「断片化しても、ここだけが残っている」という、さっきのおにぎり放り込むときの歌とかですね、食えなかった苦勞話とかですね。そういうふうに、「ここだけが残っている」ということを手掛かりにして、その一話がどんな形で人々の間で生きてきたかということ、考えていきたいないつも思うんです。

完成度の高い話を研究する人たちは、集めて並べて、こんな珍しい話が、こんな新型があった、というようなことを時に競い合うことがあります。そして現代では話が非常に壊れてきています、時代の中で。こんなふうに断片化したものは、研究の対象にならないというように、投げ捨てられることもございます。

でも、それも一理あるでしょう。しかし、私たち探訪者は、「断片としてでもそこだけが残っている意味を考えよう」って、反対にですね、そこからこの話に入っていこう。それができるのは、私たちが一話一話、お一人お一人から話を聞いてきた、そのためにできることであってないうふうに思うわけなんですね。

こんなちょっととりとめのないような話になりましたけれども、民話を聞いて歩く人間が、聞いて歩いて、断片のような話を拾い集めてきながら、そこを覗きメガネにして一つの話を見ていくと、こんなふうな想いで「食わず女房」を見ることもできる。「食わず女房」が陰ながら、表立ってはちっとも出てこないけど、陰ながら生き活きと生きてきたことのなかに、私たち先祖の女たち、そして男たちの暮らしが、やっぱり、じつと横たわっているんだなあということ、あらためて認識させられるのです。

ちょっととりとめのない話でしたが、私の話はここで終わらさせていただきます。

記録 小野 津子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

小田嶋—ありがとうございました。感想でも出てきたことともすごく響き合うような話題提供だったなあと
思います。断片の話、陰の話から見ていこうという視点でみなさんにも何か考えていただければと思い

ます。

一つの話提供として小野先生に話していただきましたが、ここでもう一つ視点をまた変えまして、食わず女房を考える時にもう一つ別の視点からも考えてみたらどうかということ、「人でない」ということで…

小野—ちょっと私が補足しなければならないことで、ごめんなさい。

そして、苦労話語った後でね、みなさんが口を揃えて「食わねえで稼げるような人いたら、そいつあ人でねえ。人だったら、食^かねくては稼がれねえんだぞ」って、こう言われるんです。「人でないものなら、食わなくても稼ぐことができる。人だったら、食わなくて稼がれないんだ」っていう、「食わないで稼げ」と言われた理不尽さを跳ね返すようにして、「食わないで稼げるようなものいたら、そいつあ、人間でない」。

この人間でないものとの同居を、民話の世界は繰り返し語っております。そのことについて、今度はバトンタッチして、島津さんに…

小田嶋—その人でないもの、人間以外のものの世界というか、人でないものたちのことについて、もう一つ話提供を、みやぎ民話の会の島津信子さんからさせていただきます。

5. 民話の中の「異界」

話題提供 島津 信子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

【異界—人でないものの世界】 これから、民話のなかの「異界」ということについて、お話をさせていただきます。私は「異界」ってなんだろうと思って、まず辞書を引いてみました。そしたら、当然あるだろうと思っていたんですけども、私の辞書には見つけられませんでした。そうなる考えるしかないわけですが、異界というのは、「異なる世界」、つまり、「私たち人間界、地上の人間界の外がわにある異なった世界」といったらいいでしょう。でもなにかちょっと分からないですね。そこに住んでいるのは、「人でないもの」です。なおさら分からなくなりそうなので、実際にみなさんがよくご存じのようなお話と比べながら、ちょっと考えてみたいと思います。

【さまざまな異界—天上・山中・水中・地中】 まず、ずっと、ここは天井がありますけども、空の上、ずっと天の上に行く、そこには、天界があります。天界には、天女とか天帝がいて、そこで繰り広げられるお話は、よく知られているのは『七夕のはじまり』のお話、織り姫と彦星の話だと思います。それから、『かぐや姫』が帰って行ったのも天界でした。それから、『桶屋の夢』というお話がありますが、桶のタガにはじかれて雲の上に上って行った男は、そこで出会った雷さまにいろいろ仕事をさせられます。

そのようなお話があって、天上にこんな国があるのかと思うと、空を見上げるのも楽しくなります。

下りて来て、今度は山のずっと深いところに迷い込んでしまった人が、今まで見たこともないような、そういうりっぱな屋敷を見て、そこに入り込むっていう話があります。『見るなの座敷』っていうのはご存じでしょうか。それから、今日おいでになっている佐々木健さんの『セキレンコ』っていうお話で、やはり、そのような屋敷がでてくる話を教えてくださいました。それから『雀のおやど』は、山の竹やぶの中にそういう世界があるんだなということをお話してくれていると思います。

さらに山の中に入っていくと、私も行ってみたいと思うんですが、『若返りの水』があって、それを飲むと若くなれるようです。それから、親が飲むとお酒、ところが、子が飲むとただの水という『子は清水』っていうようなお話もあります。山の中には、いろいろな異界があるようです。行ってみたいとも思いますが、ちょっと迷い込むと怖いですね。

今度は、水の中を見てみますと、まず、海の底には竜宮があります。亀の背中に乗って海の中に行って、乙姫さまと楽しく過ごす『浦島太郎』の話はみなさんよくご存じだと思います。海の中に入って行って、本当に息ができるのかなあとか、塩水は辛くないのかなあとか、そこでお話なんかできるんだろうかと思わずけれども、そこは異界の不思議なところですよ。

さらに、乙姫さまの病気を治すために、だまされて海の底に連れていかれて、危うく生き肝を取られそうになった『猿の生き肝』の話などもあります。

では、川や沼にはどうかっていうと、そこにも、竜宮と似たような世界があるようです。

【阿武隈川底の機織り姫】 私は丸森の生まれなんですけれども、あそこに流れている阿武隈川の丸森橋、古い方ですけども、その下の辺りは、とても川底が深いようです。そこには、機織りをしているお姫さま、機織り姫が住んでいるらしいですね。

近くで木を伐る仕事をしていた男が、間違っ^て手を滑らせて斧を川の中に落としてしまいました。川の中に潜って行って、その斧を取りに行こうと思ったら、川底の岩がぐぐつと割れて、中には、機織りをしているきれいな女の人、お姫様がいたというのです。そして、「あんたが婿になってくれるなら、この斧を返してもいい」なんて言われたものですから、その男はもうそこに、そのお姫様と一緒に暮らします。

私は、この話を聞いたとき、丸森橋の下、どの辺にあるのかなあとか、ちょっといてみたい気持ちもあったんですけども、機織り姫は今もいるのだろうかときどき覗いてみたくなります。

でも、その男が数日間過ごしただけのはずなのに、地上に戻って見たら、もう何年も経っていて、あたりに知った人は誰もいなかったというのですから、潜ってみる勇氣はないですね。そんなこともあります。

今度は、地面の下、地中にも異界があります。おじいさんが、庭に落ちていた豆を追いかけて、ずっと穴の中に入っていくと、そこにはお地蔵さまが立っていたという『地蔵浄土』の話。それから、おむすびとか餅とかを穴の中に入れてやると、そこにはネズミが餅搗きをしている世界があった、『ネズミ浄土』の話は、いわゆる「おむすびころりん」の話なんですけど、そういう話もあります。

でも、この穴から、どうやって入るのだろうかとか、不思議なところですよ。この穴は隣の欲張り爺さんも入ることができるのですから、不思議だなあって思います。

【人が異界に行く話】 今までお話したそれぞれの話は、「人間界の外で起こるお話」または「人が異界に行く話」です。これらは、「こんなところがあつたらいいな」という理想郷として語られていると思います。そこに行ってしまうと、自由自在に動くことができるのですが、天界から地面の底、海の底までとても範囲が広いです。そこに行った人間は、とても不思議な体験をしたり、富を得たり、時間の流れがとても速かったり遅かったり、いろいろ体験をしますけれども、最後には、必ず元の世界に戻って来ます。

【人でないものが異界からやってくる話】 では、逆に「異界から、『人でないもの』が、人間界にやってくる」話はないだろうかと考えますと、たくさんありますね。

「山の中」の異界からは、たとえば『三枚のお札』の山姥とか、鬼婆、山男とか雪女、『瓜子姫』の天邪鬼、天狗や鬼など様々な「人でないもの」がいて、そういうものたちが、いろいろな形で昔話に出てきます。

【野郎っこと鬼婆】 私は、栗駒の榎原村男さんっていうお爺さんから聞いたお話が大好きなんですけれども、『高たかっくり低ひっくり』っていうお話があります。それは、山の中に迷いこんでしまった野郎っこを泊めてやって、夜中に「うめうめそうな野郎っこ来たなあ。頭から食うべかなあ、腿ひざたから食うべかなあ」と言っ

包丁をといでいる鬼婆が出てきます。この鬼婆は、「高^{たか}っくり、た^たっくり」ってはやしてもらおうと、自分の手足がどんどん伸びていくんです。それで、屋根裏に隠れていた野郎っこは、危うく取って食われそうになります。その時に、そばに居てはやしていたお爺さんの機転で「低^ひっくり、ひ^ひっくり」っていうふうに言って、その伸びていた手足がぐんぐん、ぐんぐんちぢんでいって、最後には豆のようになって退治されてしまいます。で、その野郎っこは助かった、という話です。私は時々この話を子ども達に語ってやるのですが、子ども達は、いろいろ世界を想像してくれて、楽しく聞いてくれます。

【動物と人間の結婚】 先ほどの小野さんのお話にもありましたが、「地上」にいる人間が動物と結婚する話があります。『猿の嫁ご』とか、それから『蛇婿入り』とか、こういう話がありますけれども、これは人間の女と動物が結婚する話で、実は、そのお父さんとかが約束してしまった、その「約束」を守らせる話が多いようです。

逆に、『鶴女房』とか『鯉女房』などは、命を助けてもらった動物が、その「恩返し」をするために人間にのところにやってきて、人間の女に姿を変えてやってきます。今回の『食わず女房』もそれに近いのかなあと思うんですけれども、この女房は「恩返し」をするためにやってくるのではないですね。

【いつもの世界が異界に転換する】 どのお話も、はじめは人間界の話として始まるんですけども、途中からその場が異界に変わってしまうなと思います。たとえば、村に浄瑠璃語りがやってきて、その浄瑠璃語りを聴きにみんなが行くんですけども、足の悪いおばあさんは、一人で家で留守番しなければならない。寂しそうにしているそのおばあさんを見て、そばに寝ていたネコが突然、「おれが浄瑠璃を語ってやっから」といって語ってくれる『ネコ浄瑠璃』の話。これはネコが人間の言葉を語り始めた時から、その場が異界に変わるのではないかなと思います。

それから水の中にも異界があって、「河童」や「物言う魚」などが出てきます。小野さんが書かれた話の中にあるんですが、『とうべえとっさ』の話。水の中から「とうべえとっさ、とうべえとっさ、取って食うぞ」っていうように声が聞こえてきます。普通だったら驚くんですけども、このとうべえさんは、「そっちもとっさ、そっちもとっさ、千も万もとっさ」と言い返して、命が助かります。実はこの声の主はギンギョという布団3枚もあるくらい大きな魚だったというんですけども、そんな話がいろいろ語られています。

【人間と異界の住人—排斥と交流】 これらの話は、どちらかというところ、妖怪とか魔物とか、あまり好ましくない「人でないもの」っていうイメージが強いんです。陰のイメージとも言えると思います。あまり広い範囲からやってくるよりは、ちょっと狭いかなと思うんですけども、人間は知恵を働かせて、または勇気をふるって追い払ったり、または、やっつけてしまいます。

その昔、異界に住むという鬼も山姥も人間の仲間と同じで、人に福をもたらすために人間界にやってくることがあったようです。たとえば、『花咲爺』の犬、『鶴女房』の女房なども恩返しをしようとやってくるわけなんですけども、隣の爺さん婆さんの欲のために犬は殺されてしまいます。男が出した欲のために、鶴女房は元の世界に帰って行きます。

以前のゆうわ座で、小野さんが「隣の欲張り爺さん婆さんの登場は、実は一人の人間の心の両面性を示しているとも考えられる」といわれました。それぞれの民話の「異界」がなぜ、こんな形で生まれ、語られてきたのか、それを考えると、そのお話の深みというか、そういうものがまた違ってくるように思います。

【「いまここ」もまた異界】 これらの異界を図に表してみたいなと思いました。私たちが住んでいる人間界と向き合う形で、鏡の向こう側に描けるかなあと思ったんですけども、ちょっと難しいですね。では、この人間界を包み込むような形でかけばいいかとも思いました。どこかにネズミ穴のようなところがあれば、行き来できないのかな。でも、それもやはり無理があるようです。

では、どこにあるのか。実は、異界というのは、私たちのこの人間界と重なるようにして存在するのだろ

うなと思います。それを信じていることができる人、それから想像することがそこで行ったり来たりもできるだろうし、何かのきっかけでそれを見たり感じたりできるのではないかなあっていうように思うんです。

私は、正直言いますと、この「民話の中の異界」について考えようと思ったときに、まず、「異郷」と「異界」ってなんだろう。どこが違うんだろう。よく、わかりませんでした。よく、霊界とか死後の世界もそういうのも異界って言葉を使う時がありますよね。それから、民話の中で「むかしむかし、あるところに」って話が生まれれば、もうそれは、異界ではないかと思って、なんかこう、とらえどころがなくて、なんと話をしたらいいか、とっても困った時がありました。

【異界の存在が救い励ましてくれる】 でも、小野さんとか仲間で話をしているときに、「人でないもの」が「人」にはできないことをやらせてくれる、そういうところが「異界」なんではないか、っていうふうに思うんですね。そういうことによって、それを語ることによって、人間自身を救い、励ましてくれるのではないか、そういう存在が「異界」なのではないかと思うと、なんて民話ってすごいだろう、すごいことだろうと思うので。これまで、自分が民話を何気なく聞いてきたことを反省しています。

私たち人間、つまり「人であるもの」が今、見ている世界は、その人によって見方も見え方も違うと思います。もしかしたら、人間界にいるつもりで、異界を見ている場合もあるのかもしれない。だからといって疑心暗鬼になるのではなく、民話の中の異界というものを知ることによって、人間界を超えた世界でいろんな体験をすることができるっていう考え方だと、豊かな見方で心がたくましくなるなあ、安定した人生を送ることができると考えればようになるなあ、そういうように思えるようになりました。そんなことで、自分の感想も含めてでしたけども、民話の中の異界について、お話をさせていただきました。

記録 島津 信子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

6. 伝承の語り手が語る『食わず女房』の映像を見る

解説 小田嶋 利江(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

ありがとうございました。いま、話題提供として二つしていただきましたので、いまいろんなことが入ってきて、頭の中が、整理がつきかねることもあるかもしれませんが、いまからですね、具体的に、語り伝えられている伝承の『食わず女房』を見ていただきますので、それに即しながら、その時ふと、なにか引っかかることでもありましたらば、その時考えていただきたいなと思います。

三つ、これから見ていただくことにします。

じつは『食わず女房』というのは、伊藤正子さんの、とてもよく語られる、よく聞かれる形の『食わず女房』を見ていただきましたけど、それ以外のさまざまな形の『食わず女房』があるんですね。「え、これも食わず女房？」というくらいに、さまざまな姿をとるお話です。特にその中から三つ見ていただくことにします。

まず最初は、先ほども小野さんの話題提供の中で出てきました、食わない苦勞を連綿と語られたという佐藤玲子さんの「食わず女房」です。小野さんの話題提供を下敷きにしながら見ていただくと、ストーンと落ちるようなお話ではないかなと思います。

ではよろしくお願ひします。

(2) 『飯食ねえ嫁ご』

語り 佐藤玲子さん(宮城県栗原市一迫・昭和六年生)・故人

めしか
飯食ねえ嫁ご

昔々ずうっと昔、あるどごにううんと欲たがりな母様ど息子ど暮らしてらったんだど。
なんぼ欲たがりだって年頃になれば嫁っこもらわねばね。

「うんと稼ぐ丈夫な嫁っこ欲しい」

ってそっちこっち頼んで世話してくれる人があってうんと稼ぐ丈夫な嫁ご来たんだど。

母様ど息子喜んだああ。稼ぐ稼ぐ。朝暗えうちがら夜遅くまで稼いで、

「ああこの嫁ご来てがら俺家の身上もなんぼが上向きになってきたんでねがあ」
ど思い始めたんだど。

とごろがその嫁っこ、大飯食らいだったんだど。根が欲たがりな母様ど息子だもの、

「こうゆうに稼ぐんだもの。こんなに飯食ねごたら俺家でもっともっと米だの麦、貯まんのに、
たまげで飯食うものなあ」

と書いてたんだど。

そんで今まで一人で盛ってテンコ盛り三膳づつ食ってだの、母様釜を傍さ持ってきて軽く二膳出
したんだど。二膳食っても嫁ごは同じように稼いだ。そしたっけ、

「なあに二膳食ったって同じように稼げるんだもの。こんどは一膳かあ」

とだんだん今度あ一膳に減らしたんだど。

今までテンコこ盛り三膳食ってだご飯だもの、一膳ではとつてもみのご入んね。土手っこさ生っ
で草っぱ、たんぼぼ、はごべ、食うのええものはみんな、すかんぼがらはごべまで食って、田の
水口さ行って、田の水汲んで、それを飲んで、晩方ようよう上がって来たんだど。

それでもまあだ母様、嫁がたんぼぼすかんぼなど土手っこのもの食ってだど思わねえがら、

「ああ、一膳食せでも、なんにも腹減ったようでねえ」

ど書いて、今度はお粥にしたんだど。

お粥つつうのは病人が食うもんで稼ぎ人はとつてもお粥食っては稼がれねえ。

ある時、田んぼさ行って、一所懸命田起ごししてらったども、腹減って、がおって、自分の起こ
した土塊さ引かがって、鍬っこ担いだまんま、冷たくなってだっけど。

暗くなってもさっぱり上って来ねえがら、息子、「見でこう」ど言われながら、息子見さ行っただど。

そしたら田んぼの中で冷たくなってながら、ぐらり担いで家さ来て、

「お母つつあん、お母つつあん、死んでらっけど」

ど言っただど。そしたら母様

「あらあ死んだってが？ 和尚さま頼むったって、銭、金かがっぺから」

ど思ったけんとも、世間体がある。「お葬式はしねつけねえべ」ってお葬式すぐしたど。

墓の前さ行ったら息子、添った仲だもの、一生懸命拝んだっけど。

「ご飯半分食せで死なせで、堪忍してけろなあ。あの世さ行ったら、いっぺえ食えなあ」

どいって拝んで、さあ帰んべがなあど思っただれば、後さ見だごどもねえめんこい女、立っただ
んだど。

「あんだ拝むの、俺さっきながら聞いてだあ。飯食せねで死なせでしまった。あの世さ行ったらい
っぺえ食えなあて拝んでらったけんとも、俺なんにも食ねで稼ぐがら、俺のごどあんだのお方っこ
にしてけろお」

て言ったんだ。

息子喜んで家さ連で来たど。

「母さん、母さん。なんにも食ねで稼ぐって言う女めっけで来たがら、なんにも心配すんなあ」
って言ったど。

その晩から飯支度しても、何も食ねで床さ入って、次の朝も、暗えうちがら起きで飯支度しても、何も食わねで、前の嫁ごよりもっと稼ぐんだっけど。暗くなつて上がつて来てても飯食わね。

初めっから「飯食ね」って貰つて来たんだがら、食んねの不思議でも何でも無がったど。ところが二十日経つても三十日経つても何にも食わね。四十日、五十日経つても顔ぞれだのような様子もねえ

「不思議でねえがあ、これはあ。様子見だ方、良んでねえがあ」

ていう事で、母様ど息子、前の晩嫁っこの事呼ばつて、

「これなあ、明日は俺どお母つあんと、遠くの町さ用足すに行つてくるがら、何にもするごどね。久し振りにゆっくり休めな」

て語つて、四幅風呂敷背負つて、途中まで行つて、途中がら戻つて来て、

「本当に今日、嫁っこ寝でんだべがあ」

ど思つて覗つて見でだど。

したあれば、馬の水釜からガラガラガラど洗つたど思つたれば、米俵担いできて、ザバーど空げる。手桶で川がらガラガラ水汲んできて、そいっちゃ空げる。木小屋がら、竹がら豆がら杉っぱ、燃える物みんな持で来て、ぼうぼう燃やして、忽ち飯炊ぎ上がった。そしたれば其処のあいづきの杉戸外して板の間さ並べ始めだ。何するっどごだべなあーど思つたっけ、ぐらり立て膝して、火みでな熱い飯で、焼き飯握り始めだど。その数、百ども二百ども戸板さ並べだ数は、数しねくしえ並べだ。

長い髪ピンコー本でシュッと抜いで解いだれば、いぎなり頭振つたれば、その頭の中に、真っ赤に裂げだ大っきな口あつて、その中さ、綾っこ突きみでな勢いでその焼き飯突っ込んだ。

おまんちちべろべろ

おまんちちべろべろ

なんとも不気味なおまじねえ唱えながら、それ突っ込んで、あつという間に、それを平らげで、まだシューッと長い髪巻いだっけど。

戸の陰っこがら覗つて見でだ母様ど息子。なんぼ堪でも、堪でも、震えが止まんね。えらい声出して悲鳴上げだんだど。もっとびっくりしたのがその嫁ご。

「今日は誰も家に居ねえはずだあ」

ど思つたのに、まさがあ戸の陰っこがら、覗つて見でだとは夢にも思わね。すっかり立て膝してたの、座り直して、

「見だなあー」

て振り向いだんだど。その顔のおつかねごどおつかねごど。夕べな見だめんこい顔など何処にも無くて、眼はギラギラ血走つて、口は耳まで裂げで山ん婆の顔になつてらっけど。

「見られだがらには、この家に居られねえ。ほだつたつて嫁ごだつて腹減んだぞ。俺、にっしや二人ども喰つてしまめてえ」

どゆつて、裏の口がら、わらわら山の方さ逃げでつたっけど。

それがらつうものはそごの家の人、お姑様ごども、息子ごども、誰えも見だ人無がったど。

これでよんつこもんつこさげだど。

記録 小野 津子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書館」プロジェクトチーム)

佐藤玲子さんの『飯食^{めしか}ねえ嫁ご』でした。

正子さんのお話と比べて、ずいぶん違ってたところがあると思うんですけど、まるで、嫁の苦労話と『飯食わな^{めしか}い嫁ご』のお話が、二ついっしょになったようなお話ですけど。

まず、独り身の男ではなくて、お母さんと息子の二人が出てきましたよね。ただ父親の影はなんだか見えないようなんですけども。

それから、まず人間のお嫁さんが一回来て、それから化け物のお嫁さんが来るという、二回お嫁さんが来てます。人間のお嫁さんには、生身の人間に、人でないような欲望を押し付けていく、エスカレートしていく過程が、丁寧に描かれていたと思います。玲子さんの食えなかった苦労というものが、なんか滲みだしているような気がします。

そして、お握りを頭に放り込むときの、「おまんにちべろべろ、おまんにちべろべろ」、先ほどの庄司アイさんの「おまんにちべろべろ」でしたけれども、他にもさまざま、投げ込むときの唄が、みなさん伴っているんですよね。先ほども出てきました、山形県小国町の佐藤とよいさんなんかは、

それ食え それ食え

それ食え それ食え

父(と) っつあの いねまに

早よ食え 早よ食え

って言って、ポンポン、ポンポン、投げ込むんですね。とってもリズムカルで楽しい場面なんです。

それから、正体を見られた女は、そのまま去ってしまいますねえ。普通のお話のように、追いかけてきたりしません。男が逃げることもなくて、ヨモギ・ショウブの由来の話もついてません。ただ男に「飯食わな^{めしか}いで働くな^{めえ}んてのは、人でないんだぞ」って戒めてから去っていきます。

こちらの語りでは出てこなかったようなんですけど、嫁がやってくるとともに、土蔵倉が建つほど身上が上がるんですが、その嫁が去ったと同時に、その蔵もさあっと消えてしまうんですね。資料の方の語りではそうゆうふうになってます。

じゃ、次に、またこれもめずらしい語りで、これは青森県の成田キヌヨさんの「飯食^{めしか}ねえ嫁」のお話です。じゃ、お願いします。

(3) 『飯食^{めしか}ねえ嫁』

語り 成田キヌヨさん(青森県十和田市・昭和七年生)

めしか
飯食ねえ嫁

むがあしむがし、あつたづもな。

むがしに、ある村に、オンジあつたつたど。(大体もう嫁っこ貰うにいい年になったら、オンジ、長男でなくて次男、三男のことをオンジって言うの。)

「いやあ、お前も年^{めえ}なんべだな。嫁っこ貰わねえばねんだ。嫁っこめっけでける」

ったつきや、

「ああ、嫁があ。生まれでがら死ぬまで、飯食ねえ嫁だば貰ってもいい」

つつた。誰も相手にしねづ。

「ばがああれ。物食せるのいだましくて、あつた話してる。誰もあつたのさ世話しねえで構ねえ」
っていだど。

そしたっけ、綺麗だ背の大きい女だづ、

「どこさ行っても、もう死ぬまで飯食ねで稼ぐがら、なんとか嫁っこにしてける」
って来たづものや。

さあ、その若え者、

(飯食ねぐれ有り難いごとねえ。どれどれんだら)

ど思っ、今度家さ置いで、まず嫁っこにして置いだつたづ。

何日したづって、朝間起きれば自分で食うのはちゃんと出来てるつたつて、飯食うふうねえど。

「なにが食ったらいがべ」

って。

「いやあ、吾、食ったごどねえ」

(いやいやあ、い塩梅した。こつたに飯食ね嫁つて、こつたに世の中にあつたもんだな。ああ、よ
がった、よがった)

ど思っ、居だつたど。

あるどき、そのオジ、山さ仕事に行った間に、隣の婆さま、

(どこにい、飯食ね嫁つてあるもんだ。普通の者でながべせえ)

ど思っ、こそつと、垣根がら覗きに來たど。

ああ、居ねえあどに、オジ出はっていったあどに、倉がら米一俵で持ってきて、大きだトナ釜く
馬に与えるものを煮る釜さ飯焚いだづ。飯できだど思っ、今度それを、戸板外してきて、
握つて、いっぱい、一俵の飯だもの並べたべえ。それを、

(いやあ、なんだべ。誰が来て食うの、なに始めだべ)

ど思っ、婆さま隠れで見でらつたづ。

そしたら、誰もいなぐなつたど思っ、周り見たら、今度髪といて、頭の天辺に大きだ口あつて、
そのおにぎり、一俵もの米のおにぎりをアヤコ<お手玉>やるように、どんどんどん投げ、
いっこ間に食つて、また髪結つて知らねえふりして居だつたど。いやあ、隣の婆さま、動転して
しまつて、

「オジ、オジィ。今、お前の倉に米なくなれば、俺も村の人どもみな食れんだあ。お前ほつた化け
物あずがって<養つて>だんだあ。出してやれ」

つつたづ。

「何したつてせえ。まあさが、吾、居ねうちに食つてるわけながべ」

つて、倉みたら、倉の米、あらがだねえづお。さあ大変だ。

「いやあお前、よぐ稼いでけでいいたつてなあ、明日家さ行つてもいいや」

つたど。

「ほお。行げづうなら行くべえさあ」

つて、ぐいっといなぐなつたど。

それがら、何日もしねえうちに、まだ欲張りだもの、

「いやあ、糸もなんも買ってけなくても、朝から晩まで機織る女欲しい」
どなっただ。まだ、村の人ど、

(ありや、まだああのホイド、まだ始まった)

って、誰も相手にしねえ。そうやっさ、また綺麗だいい娘、

「いやあ、糸もなんもいらなくても、朝から晩まで機織るがら、なんとか嫁こにしてけで」

って、まだ来たど。いやあ、まあだ、それを家さ置いて。倉の脇に機置いた小屋あるづ。

(んだら、そごさ糸もなんも買ってけなくても、機織るんだもの、んだら、飯食ったたっていい)
ってね、それさ飯食せで、したっけ、

「吾、機織りに行くがら」

って、その小屋さ入って、外に居て聞いてれば、トンカラトンカラって機織ってるづものや。

(おやあ、い塩梅した。今度こそ儲けだあ。町さ行って売ってくればなんぼ、なんぼなる) と思っ
て、自分で勘定して<算段して>、

(はあ、い塩梅した、い塩梅した)

って喜んで居だど。

隣の婆さま、

(どこにい、糸もなんも買ってけねえ。俺あ山がらカラムシ取って来て、紡いでやっ糸にして、
ひと冬に一反か二反織れば、いい機織りだって褒められる。どこにい、糸もなんもねえで機織って
る聞いたごともなんもねえ。どれ、んだら見てみべえ) と思っ、まだこっそり来て、小屋んどっ
から、こそっと開けて見たど。ほしたら、大きだ山の蜘蛛が、機の上さ乗っかって、お尻がら糸出
して、そこら中もう蜘蛛の巣だらけにして、音だけは機織ってらようにトントントントンど音させ
て居たっただ。まだ、婆さま、

「オジ、オジ。お前も覗いでねがあ。今になんも無くなれば、お前もみな、あの大きい山蜘蛛に食
れんだ。村の人ど、みななくなるべえ。見ろ」

まだ、オジのこったもの、覗いて見た。したら、やっぱり、大きだ山蜘蛛が、機下に居て、そこ
ら中蜘蛛の巣だらけにして、お尻から糸出して、トントントントンと機織る音させてらったづ。い
やあ、まだそのオジだもの、

「出はっていげ」

って出してやったべ。

それでおけばいいものよ、まだ少し経つど、今度また、

「出汗もなんも入れなくても、旨え汁飲ませる女欲しい」

どなっただ。これも、まだ仕方ねえ。まだそやってるうちに、まだ、

「出汗もなんもいらね。俺あ朝間がら晩まで旨えお汁飲ませる女だ」

って、まだ来たづもやあ。またそれを、

(おや、い塩梅した)

って、家さ置いだんだけ。

隣の婆さま、また覗きに来たっけ、大きだ鯛の化け物が、鉤ヅキ<囲炉裏の鉤>さ鰓を掛けて、
大きな鍋さ、自分の尻尾入れて、ワヤアワヤアって出汗取ってたど。

(いやあ、これもまだあ、ほっただ化け物置いだ)

ど思っ、今度もまだ、

「オジ。今にお前も食れるべ。俺あも食れる。あつたの出してやれ。あんな化け物ばりお前集めで、

ばがでねえが」

したら、オジだもの、

「いやあ。お前^{めえ}、明日家さ行げよ」

って言ったっけ、まだその女ごの、

「はい、行きます」

って言ったづおんや

(ああ、い塩梅^{あんばい}した)

ど思っけ、

「いやあ、へだらな、吾あ行くがら、倉にある^{おっ}大きい味噌樽、(うちの方ではほら、味噌作ってば、人数も多がったがらね、二年おきにだが、豆一俵、それをね、大きだ釜さ立ててね、それ蒸し煮にするの。それが美味しかったけどね) その味噌樽をける」

つつたづ。

「いい、なんでもいいがらけるがら、早く行ってけろ」

つつたづ。

したら、朝間に飯食って、オジ一服して、横座さ座っていだど。したら、

「いやいや、二、三日だけども、世話になりましたじゃ。行きます」

って、ああ今その樽背負っていぐようにして、ここさ用意しておいて、煙草吸ってらのよ、胡坐かいまま、どんと抱いて、その大きだ味噌樽さどんと入れて、それを背負って、出掛けたんだって。

(いやあ、大変だ。化け物に食れべし。どうやって逃げだらいいがあ)

なんぼ勘定したって、化け物だもの、どんどん山の方さ行くづもの。そしてるうちに、山の方で、

「おおーい」

って音したど。だっけ、そのオジを背負ってら鯛の化け物も、

「おおーい、今来たよおー」

「連^せできたがあー」

「うん、背負ってきた」

「今、大きだ鍋掛けてながら、早く来おい。みなして煮て食うべしよ。どこにい、世の中に飯食^{めしか}ねえ、糸もねえで機織るつつう、そつたんだ欲たがりだあ、生かしておいてもなんねがら、みなして食ってしまうごとになった。早く来い」

いやあ、そんだって休むわけでもねえ。どんどんどんどん行ぐんだって。

(いやあ、どやって逃げたらいいがべ)

って。立ったたって、一俵も入る樽だもの、大っきがべし。

そしたら、やっぱり、なんぼ化け物でも、山さどんどん走ってるうちに、疲れたべき。大きだ木の根っこさ休んだんだと。そしたら、い塩梅にその木の枝がなびいて、それさ掴まって、やっと樽がら抜けて、その木の上さ隠れて、んだら、大き^{おっ}い樽背負って来ただって、今までもこで、来たどって、むっくど起ぎで、入ってらったど思っけそれ背負って山さ向かったづおん。

ああ、その欲張り男が、逃げたづう。今来た山道、どんどんどんと逃げたんだって。そしたら、その化け物どが、山さ行って、さあ樽を下して、

「大きだ釜の湯も煮だってだ、さあ煮て食うべし」

って、樽見だら入ってねえ。

「さあ、大変だ、逃げられた。へば、あの休んだどこだ」

って、ああ追って来たづもやあ。そのうちに、だんだんに後ろさ見えて来たんだと。なんぼ走^{はし}だつて、見えてきた。

(いや、困った。どうやったらいがべ。捕まえられだんでは、食れでしまう)

ど思って、周り見たっけ、菖蒲と蓬がいっぱい生えだどこがあったんだって。そこさ、ぼんと跳ねて隠れだづ。

そこまで来たっけ、その化け物だちが、

「ばかっこ。この菖蒲と蓬の中さ隠れたべ。俺^{おら}んどは魔物で、菖蒲さ掴まれば、もう骨が見えるほど切れてしまう。蓬さ掴まれば、手が火傷して、指もなんも溶けてしまう。んだがら、菖蒲と蓬の中さは、隠れられねんだ。お前^{めえ}、い塩梅に命拾いしたべえ。これがら、こった悪いごと考えんなよ。お前^{めえ}さ命けでいぐ」

って、山さ戻って行ったづ。

そらがら、そっから出はって、

(いやあ、魔物づうのは、こうやって、菖蒲と蓬好きでないもんだがら)

って。それがら、屋根さそういう魔物が来ないようにって呪いで、屋根さ菖蒲と蓬挿したんだと。

今でもね、やってるどこあってね。

あるとき、十和田の郷土館に行ったらね、若い奥さんみたいな人たちがね、一生懸命その菖蒲と蓬を束ねていたの。

「これ、何にするの」

って言ったら、

「分がねえ。年寄りど、なんだが呪いにやるってら」

って。その意味分がらなかったの。若い人たちはね、その訳分からしないで、ただ菖蒲と蓬がなんか呪いに使うって、そういうだけしかないのね。

そういう話聞きました。

記録 加藤 恵子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

はい、成田キヌヨさんの『飯食ねえ嫁』なんですけど、これもまた、とても珍しいお話ですよ。

まず、化け物は三人やってくるんですね。で、男は先ほど出て来たオンジと呼ばれる独り身の次三男、ほんとにそのオンジが出てきます。そして仕事は山仕事をして暮らしてるような雰囲気ですね。田んぼを耕したりしてないみたいなんですね。

それから男の望む嫁が三人、三つの嫁を望むんですけれども、死ぬまで飯食わないで稼ぐ、これはよく出てくる飯食^{まんまか}ねえ嫁なんですけど、つまりご飯食べないでも労働してくれる嫁。それから糸もなにもなくて朝から晩まで機を織る女。つまり、家の中の女性のもっとも大事な仕事である織物を、元手もなくてやってくれる嫁。それから三番目は、出汁もなにもいれずに、うまい汁を飲ませる女。これもとても都合のいいものですが、女性のほんとに重要な役割である料理を、元手なしというか、出汁もなしにおいしい料理をしえくれる嫁。

そういう三人の嫁を望んで、その望んだとおりの嫁が、やっぱりやってきます。それに対して、オンジは、「ああ、それはいい、それはいい」と言って、すぐ嫁にするんですけれども。「そんな人でないことが、なんでもできるんだ」という普通の感覚から、人の世の社会の感覚から、それに不思議をする人たち、それがここでは「隣の婆さま」なんですね。そういう村の中の他の人たち、村の人々みたいなものが、そこから垣間見えるようになっていきます。

ここで、のぞき見をするのは、その婆さまなんですね。その婆さまが、「どこに飯食わない嫁があるものか、普通のものではないだろう」、つまり「人ではないだろうよ」と言ってます。

それから糸もなしに機織りをしてくれる嫁のところで、「おれだって、カラムシを織るのはすごく大変だったんだよ」っていうのが出てきますが、カラムシっていうのはご存知の方もいるかもしれませんが、古代から織物の原料になってある植物ですよ。今でも越後上布や小地谷縮はカラムシで作られているそうです。

第一第二第三の嫁の正体はそれぞれで、最初は頭に口のある化け物、これは今まで見てきた飯食わない嫁と同じですが、二番目は山の大蜘蛛なんですね。三番目はこれ面白いんで、鯛の化け物なんだそうです。鯛の化け物なんかは自在鉤に自分の鰓をつるして、下の鍋に尻尾をパシヤパシヤやって出汁をとるっていう、想像するだに面白いんですけども。

それから、二番目の蜘蛛というのは、さきほどの話題提供のお話でもあったように、化け物が蜘蛛である事例っていうのは、西日本に非常に多いんですけども、じつは東日本にも、ここに存在するっていうのがこれでわかりますね。

第一第二の嫁は、正体が見破られると、男に出てけと言われますが、逆らわずに去っていきます。「行けというなら行くわさ」と言って、黙って去ってくんですが、第三の嫁は男に、「樽をくれてくれろ、行くから」って言うんですが、「樽」っていうのは「桶」と同じものですね。ここでやっぱり桶が出てきます。嫁はもらった桶に男をドンと入れて、それを背負ったまま、山に連れて行こうとします。第一第二の嫁も山に居て、「いま来たかあー」と言って、男が来るのを待ってるんですね。

ていうことは、この化け物たち三人とも、山がその実家というか、すみかのようなんですね。男は樽の中に入れられたまんま、どんどん連れていかれるので、逃げようがなくて困ってるんですけども、鯛の化け物が休んだところで、ちょうど上から枝が伸びてきてるのを、それに伝って逃げます。男が逃げたのを知った化け物たちが追ってくるんですが、ここで男はショウブとヨモギの中に隠れて、なんとか難を逃れます。

ここで、今までも出てきたように、「魔物はショウブには切られ、ヨモギでは火傷をする」と、ここではショウブとヨモギを分けて説明してますね。そして男にいましめをしていきます。「悪いことは考えるなよ、お前に命くれていく」「そんな人でないことを考えるなよ」というふうに言って、おどして去っていきます。

それから屋根にショウブとヨモギを挿して、そういう魔物がまた山から来ないようにして、男はそこで魔物をよけたということですね。今もそういうことを続けている。最後にキヌヨさんは、その意味を今の人たちは忘れて、知らなくなっちゃった、忘れてしまったというふうに、嘆いていますけれども。とにかく、ヨモギとショウブの由来はここでも語られています。

では最後に、宮城県の非常にすぐれた語り手であられました、永浦誠喜さんの「口のない嫁ご」を見ていただきます。お願いします。

(4) 『口のない嫁ご—鬼打ち木の由来』

語り 永浦誠喜さん（宮城県登米市南方町・明治四十二年生）・故人

口のない嫁ご—鬼打ち木の由来

むがし、あるとごにね、非常に欲たがりな若い人あって、そして、独り者だったらしいのね。だから、さて、嫁ご、もらわなかねえげつつも、口のある人間だと、もの食しえながねえしする、

食べ物食しえんで、惜しいと思ったから、なんとかして、口のねえ嫁ごできれば、いいと思ったんで、

「口のねえ嫁ごあったら、もろうから」

って、仲人が来て、そうばり話してやってた。

で、そしてるうちに、口のねえ嫁ごが来たんだと、そういう話、聞きつけたがして。で、しゃべったか、しゃべんねえが、わがねえげんつも、とにかく、おなごに間違いねえしするし、嫁さんにその人なったんだと。

で、一週間ばり居た。さっぱりご飯もお汁も食わせねえのに、元気であるしすっから、妙なやつあると思ったって。

「今日は少し、用足しに行ってくっからな」

って、その欲たかり、家出わって、

「おれ居ねえあとに、なじよなまねしてっか、そいつ、覗いてみっぺ」

と、思って、隠れで、そして中見でやった。そしたら、そいつと知やあねで、その嫁ごあね、鍵もって、蔵さ行って、そして蔵の戸お開けでから、米俵一俵、担いできた。

「力持ちだなあ、あいつなあ」

そしたら、どんどんと、大きな釜で火い焚いて…むかし、平釜つつのあつだからね。豆腐などあれ煮るねえ。ああゆう釜あつたんで、そいつさどんどんと火い焚いて、その米みな開けて、そしてそいつで、煮だんだと。

あと、釜からすぐってきては、おにぎり握る。すぐってきては、おにぎり握って、味噌屋の味噌蓋の上さそいつ、味噌蓋持ってきて、味噌屋の桶の蓋持ってきて、一つ二つ三つ、重ねていっぺえ並べたっけど。

「なんのまねすつとこだ、あいつあ」

て。

それから髪ふぐしたらね、そごさ大きな口あつたんだと。そいつ、おにぎり握ったやつをね、ぼんぼんと上さ投げてやって、その口でみな受けで、そして、たちまち食ってしまったと。

「よっく、あのぐれえ入るもんだな。体よりもおにぎりの方が余計なようだな。で、ほだれ、一週間も十日も、あいつあもつはずだ」

と語って。

「こいつあ嫁ご、口がねえ嫁ご、食しえんなひでえから、もらったこだいいげんつも、たちまち食いつぶされでしむから、こいつあ、なんとかがして、出さなくてわがねえ」

そう考えたから、

「いや、お前実家さ、おれ、顔ばりも出さなげねえ。どこだか、実家さ案内してけろ」

って。

嫁さん、だから、

「ほだらば実家さ、案内するから。ただ途中にね、おれ、体さ悪い草生げつとごあつから、おれどこ、桶のようなものさ入れて、大きな桶さ入れて、そして背負って行っきゃってけらい」

そう言んで、大きな桶、漬物桶だかなんだか持ってきて、そしてそいつあ入れて、背負って出わっだ。

で、途中まで行ったらね、そしたらショウブとヨモギの中、こいでいぐとごあつたんで。こいでるうちにね、

「ごご、おれ、おっがねんでがすやあ。ごご、ショウブとヨモギの中おれごごと、お尻あ腐れでしまつて、そして命さかがわるので、だからおれ、桶こがを入れて背負ってきてもらったんですが」
と言うんだと。

「ああ、いいこと聞いた」

ど思ったから、嫁ごの実家まで行がねえうちに、そごさ、そろそろと下ろしたと。

「おれ、おしっこ出っからやあ、ちょっくら、下ろすから」

で、そごさ下ろして、ただばらばらと逃げてきたと。あど嫁さん、どうなったが、わがねえげんつもね。

とにかく、そして、あと家いさ帰ってきてはあ。あと、ほれ、こっちゃ来ねがったと、嫁ごがわがったらしくてね。ほして、「いがった、いがった」と思った。

ところが、おさまんねえがったのはね、その嫁さんで、一週間ばりのうち、子ども、はらんでしまったと。かけてしまったと。そんで、生まれた家さ行って、生んだこだあいいげんつも、大きくなつたらね、人間つらの面して、角ほっこ生げてやった。で、鬼の国の子どもたちと遊ぶんにね、

「お前、人めえっこくせえから、おらど遊ばねえで、人いっこど遊べ」

して、つまはじきされで、遊んでもらえねかった。

で、しゃあねえから、その嫁ご、ああ、子どもについてのおがつつあんね、そいつを連れできて、そして家中いながさ入るわけにいがねからわ、

「こいつ、お前めえのとうちゃん家だからな、行げ」

って、そして離ほしでやって、家いさ帰ったんだと。

したら、角ほっこ生げたんだから、こんどあ人間社会にしても、遊ぶ人はねかったと。で、なんぼ子どもだって、そいつ、友達のねえ、そして角ほっこいの生げたのは、人間社会に居らんなくなつてしまつて、実家さもどす。

「また実家さ、『人いくせえから』つの、言われてもなしてもしゃあねえから、あっちゃ行げ」
って、その欲たがり、途中まで送つてきて、あど、嫁さんの実家さやつたど。

したら、そいつもまた、居らんねえ。いたたまんなくなつてしまつて、あと、鬼のおがつつあんいに送らつて来て、そして門口まで来だことはいいが、家いん中さ入りかねてね。

ちょうどそいつあ、年越しの日だったんだって。そんで、鬼打木いつつのは今でもある、門松立でたら、割つた木、そいつ立でかけおくのね。そいつあ、頭ぶつけで死んでしまつたと。んで、鬼打木という名前は、そごから出たんだと。

で、えんつごもんつごさげだとしゃ。

記録 小田嶋 利江(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

はい、永浦誠喜さんのお話でした。

伊藤正子さんから、玲子さん、成田キヌヨさんと、女性の語り手だったのが、ここで男性の語り手になつて、また味わいがすごく変わったお話になっております。

前半の筋立ては、正子さんのお話と同じなんですが、男が正体を見破つて、「実家に顔出しに行くので案内しろ」というふうに言うんですね。女は「途中に体に悪い草が生えてるので、桶に入れて背負つてつてくれ」と言つて。男は大きな漬物桶に女を入れて、背負つて出かけます。ここでも桶が出てきます。

途中で、ショウブとヨモギの中をこいでくと、女は「ショウブとヨモギで尻が腐れる」と言うので、男は

桶を下して、逃げて帰ってしまうんですね、「これはいいことを聞いた」って。それくらい、女は戻ってこなかった。

この女の実家は、すみかは、ここも山の奥のようですね。その境に沼や湿地があって、そこにショウブとヨモギが、境目に生えているような感じだと思います。

そして女は、ここでも、男を攻めたり、戒めたり、脅したりはしてないんですね。

その後半で今までにないお話になって、女は実家に戻って子どもをうむんですけど、それは人の顔に鬼の角が生えてた。鬼の子どもたちから「人くさいから、鬼と遊ばず人と遊べ」と言って、鬼の国でつまはじきにされた。永浦さんの話では、男のいる人の世界と、女のいる鬼の世界っていうものが、二つとも出てくるんですね。女が嫁になることで、二つの世界は交わって交流するんですけども、二つの世界に属する子どもが生まれると、その子どもはどちらの世界においても邪魔にされてしまうんですね。つまはじきにされてしまう。

女はいったん男の家に連れて戻るんですが、やっぱり鬼の角が生えた子どもは、人の世界でも仲間に入れられない。こんどは父親がもう一回鬼の国に連れて行くんですけども、そこでも居たたまれなくなる。そして結局父親の家の前まで来るんですが、中に入りかねてしまう。でその日が、ちょうど大晦日、年越しの日で門松が作ってあった。門松の根元に割った木を立てかけておいたんですけども、それに頭をぶつけて、その子どもは死んでしまった、ということなんですね。

結局、子どもは両方の世界に属するものなんだけど、どちらからもつまはじきにされて、居場所がなくなって、結局自分で死んでしまうことになります。それ以来正月に、鬼打木という、立てかける割った木というのは、鬼打木と言われて、今でもそれは続けられている。ていうことは、鬼の世界と人間の世界は、それで区切られていて、今も外の世界は鬼の世界で、もしかしたら鬼は、またやってくるのかもしれないのかなあと、感じますよね。

こんな永浦さんの話は、不思議な、胸の痛くなるような話ですけど。

あと、資料には二つ、お話を載せています。これは映像はないんですけども。

五番目に小笠原正子さんの『飯^{まんま}食わないお方』。

これは嫁が、正体を見破られても、文句を言わずに去ってくんですが、その去るとき、唄を歌いながら去って、その文句がとても興味深いですね、載せています。

六番目の『銭洗井戸と下食坂』。

これも、ほんとに、今までにないようなお話だと思うのは、嫁に来た女房が、「おれは下食という化け物で、いままでだれの嫁にもなれなかったのが、お前さんに嫁にしてもらったのが、とてもありがたかった」と感謝をして、福を授けていく話なんですね。

そうしたお話が載っていてとても面白いので、あとでご覧になってみてください。

以上、伝承の語りである『食わず女房』を見ていただきました。

最後にですね、話題提供として、この『食わず女房』という、食えない苦勞とか、異界とか、現実の我々にとって、どうゆうふうにつながってくるのか、考えるために、なんらかの手がかりがあったらいいなと思いついて、それについての話題提供、「現代に生きる食わず女房」ということについて、小野和子さんにさせていただきます。よろしくお祈りします。

記録 小田嶋 利江(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

7. 現代に生きる『食わず女房』

話題提供 小野 和子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

「食わず女房」の話って不思議でしょう。面白いでしょう。全部一話一話違うんです。先ほど、八十人余りの人から聞いたといましたが、八十色あるんですよ。この話の不思議さと構成の奇怪さ。それは学者の興味をそそるだけでなく、私たちにとっても、なんて面白いし、なんて変わってるんだらう。でもよくわからないところがいっぱいあるなあなんていうふうに受け取りますよね。民話の世界って大体こんなようなものなんです。よく訳の分からないことを訳の分からないまま、みんなにぶつけてよこして、そして、何かを手掛かりに考えてみるよっていうようなところが、民話にはあるんですよ。それを受け止められるか受け止められないかっていうのは、私たちの生き方にかかっているような気がするときもあります。

この「食わず女房」は、先ほど私は、食えなかった女たちの苦しみが底辺にあって、そして、こんにちまで生きてきた話だっというように申しました。ただ、現代の食べ物が有り余っているこの時代に、食えなかった苦勞を語るこの話が、どんなふう生きてくれるのかしらっていう不安も感じないわけではありませんでした。

そんなときに、私はひとりの高校のカウンセリングをしておられるカウンセラーの方から、こんな手紙をいただきました。だいが前のことですが、この手紙を読ませていただきますね。

今、私がカウンセリングをしてお会いしているお嬢さん、高校生はいわゆる過食嘔吐。常識では考えられない大量の食べ物、釜いっぱいのご飯、食パン一袋、それに菓子パン、スナック菓子などをいっきに食べてしまい、それをトイレなどで無理に全部吐き出してしまうという行動をやめられないで苦しんでいる人です。苦しいと訴えながらやめられない。「満腹を越えて苦しみになるまで食べているそのときだけが幸せ。でも、吐き出さないと太るので恐ろしくて吐くという毎日だ」と、彼女は語ります。彼女の話すあれこれを聞いているうちに、私の脳裏に、あの「もの食わぬ嫁」のイメージが深々と浮かんで来て、それがとても鮮やかなものだったので、はっとしてしまいました。

何も食べない嫁が、誰もいなくなった家で、頭の真ん中にある巨大な口に、おにぎりをホイホイと放り込んでいく鬼気迫る姿は、夜中に家の中のありったけの食べ物を探して、食べずにはいられないという、彼女の姿とあまりにも似かよっているように思えてなりませんでした。(略) 彼女は模範的なお嬢さんでした。そのお嬢さんが、「夜に一人になると、なんのために生きているのかとか、生きているってなんだろうかと考えだして、暗くなって落ち込んでいく」と、ぽつりと話した彼女に対して、何か意味のある言葉を返すことのできないカウンセラーの私でした。

彼女の話聞きながら、あたかも、「飯食わぬ嫁」がどんどんおにぎりを頭の中の口の中に放り込んでいくように、彼女が自分自身の内にある大きな空っぽを、食べ物で埋めようとしているように見えて、いわば泣きながら食べている痛ましさを感ずるばかりでした。

他者である私が、彼女にとって何かの手伝いができるかどうかを思うと、無力感ばかりが先に立ってしまうのですが、そのようなときに、なぜか「飯食わぬ嫁」のイメージが鮮明に浮かんでくるのが、せめて彼女に対する共感を生き生きと感じさせてくれ、助けてくれるように思います。そして、「飯食わぬ嫁」の話、そのイメージを浮かべる。そのことによって私自身が支えられている

と思うのです。

ちょっと手紙をとびとび読みましたので、はっきりとはしなかったかもしれませんが、一見関係のない今、過食と嘔吐を繰り返している心の虚ろを埋めるように、食わずにはいられないという高校生を相手に彼女は、「食わず女房」の話を思い出して、そのことによって、「私が支えているのです」と書いてあることに、私は感動しました。「食わず女房」の話を、こんなふうに関に立てましたと書いていうのではなくて、関係がなかったとしても、その話が存在することによって自分を今支えているのだというふうには手紙は結んでありました。

民話が私たちの心にいきるってことは、こういうことかなあと思うんです。直接その民話が何かの役に立つということではなくて、全く関係がないようにみえるその話の存在を知ることによって、今の自分を支えてもらうことがある。そういうことが彼女の手紙に書いてありました。私自身も、ときどきそういうことがあります。

先祖たちが語ってくれた、一見荒唐無稽としか思えないような一話の中に、さまざまなものが込められていて、その話があったなあと思うと、ふっと心が和んできて、明日も元気に生きられるかもしれないという力をもらうような気がいたします。

この彼女の手紙をみなさんに紹介させていただいて、「話がいきる」ということの現代的な意味をまたみんなで考えてみようではありませんか。いろんな民話を取り上げながら、その話の命や糸口はどこにあったのかということを含んで考えてみたり、解いてみたりしながら、その民話によって支えられ得る自分を作っていくことができれば、先祖たちはどんなに喜んでくれることかと思えます。

小田嶋—ありがとうございました。ほんとに様々な問題を出していただいて、みなさんもさまざまな面でいろいろ考えること、感じるがあったと思うのですが…

記録 加藤 恵子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

8. みなさんと感想や意見の交換2

参加者の皆さん

小田嶋—あっぺとっぺになってもかまわないので、自由に感じたことをこれからみなさんに出していただければなあ、思うんですが。

まずどなたか、口火を切っていただける方は、いらっしゃいますか。

参加者G(女性)—今日は非常に興味深いお話をいろいろと、いろんな角度から聞かせていただいて、ありがとうございました。わたしはこの話を子どものころ聞いたり、読んだりして知っているんですが、わたし自身東京の出身で、五十年以上前の子どものときに思ったのは、なぜこの嫁さんが、口があるのに、それからまわりの目がなくなったときに、見てないんだから口で食べればいいのに、頭の後ろをほどこいて、口からたべるんだらうなあってのを、子ども心に考えていました。

それから、もう一つは、ショウブというのは、とてもヨモギとか五月五日とか、中国的な要素の由来があるようで、東京とかでは端午の節句に、ショウブの葉をお風呂に入れたりとかするんですけども、いまそれを宮城県とかで聞いてみると、中国的な要素の話と、こちらでのお嫁さんのすごくこうつらい生活がわかって、人が見ていなくても、もう口ではないところで食べるみたいな、そういう鬼気迫ったところを、すごく感じました。

でわたしは、それを二つ、頭の中ですでに考えていたんですけども、非常に貧しい中で、女の人がこの話を作っていたのではないかな、というのを感じました。なぜなら、お握りにして並べていくというところは、とても男の人ではやらないだろう。お米をたくさん炊いたら並べて、みたいなところと、あとそれから女性が食べないっていうのはいいんだという、貧しさのところ、うらみとか憎しみではないんですけど、そういうある意味痛快さもありながら、そんなところも感じたんですけども。それが伝承してじっさいこのように残っているっていうのが、すごいことだなあと思いながら、いろいろ考えさせられました。ありがとうございました。

そのお握りにするっていうのは、女の人が考えたっていうのは、どうなのでしょう。だめなんでしょうか。

小野—だめともいいとも、言えないんですけどね。でも、ご飯を丸く握って、しかもたいていずら一と、何百も並べたって言うんですね。でしかも、たいていは、どーんと、足で引き戸をはずしたり、雨戸だったりすることもあるんだけど、そこにずらり並べて、それをアヤコ突きみたいに、頭にどンドン放り込んでいったっていうんですね。単に頭の中に釜からご飯を放り込んだんじゃなくて、握って、お手玉をつくように入れたっていうところに、なんともいえない切なさが、滲んでるような気もするんです、女性のね。単に飢えを補うために、どンドン、おへらでもってじゃなくて、握ってから、それを唄を歌いながら、お手玉を突くようにして頭に入れてって、この場面が、なんとも不思議なんですね。明快にこれこれっていう理由は言えないんだけど、ここが単に、どンドン放り込んでいったというふう聞くよりは、こうゆう形で聞くことによって、忘れられない一つの場面を作っているような気がするんですけども。ごめんね、返事になにもならなくて。私にもわからないんです、どしてお握りにしたか。でも必ず、だいたいお握りになってるんです、ほんとの話。で、お握りに握ったってことと、それを、お手玉のように呪文を唱えながら、頭の口に放り込んで、その場面っていうのは、鬼気迫りながら、なんともいじらしいような、気もするんですよ。腹を空かした女房の姿として。ごめんね、適当な返事で。

小田嶋—ありがとうございます。他にどなたか、いらっしゃいますか。

参加者H(女性)—さっき小野先生から、カウンセラーのお話を聞いて、わたしのことを思ったんですけど、暮らしの中で、生きることの中で、せまーい価値観の中で生きてたわたしが、想定外のことに出会うわけですね。そのときにわたし、今思えば、子育ての話なんですけど、想定外のときに、いろんな、たまたま大人になってから聞いた民話とか昔話の中で、「それは、三年寝太郎ってのもあったよな」とか、そういう子育ての中で想定外のことが起きた時に、自分を、価値観の中でどうやってそれを、そういう想定外を収めようかと思ったときに、そういう昔話の中からね、都合のいいように自分が、そういう話をくっつけてきて、自分を立て直したこともあったよなあ、なんてちょっと思ったんですね。

あと、今の民話は、結局昭和の初期とか、大正とか、明治とか、苦しかった時代の女の人たちが作ったようにも感じるんですけど、現代で言えば、ほんとに苦しい女の人も、子どもたちも苦しい人もたく

さんいるような、気がするんですね。実際に、わたしの身内でちょっと、摂食障害で苦しんでいるような人もいたりすると、そういう人たちの現代の苦しきから、なんかこれからまた、民話ができるのかなあ、なんて、ちょっと思ったんですね。

ていうか、さっきも言いましたけど、自分の暮らしの中での苦しきっていうときに、あるいは、むかしわたし大病したときにね、ガンだったんですけど、抗がん剤で苦しい時に、なんとかその苦しきを乗り越えるときに、自分でこう、勝手な妄想とかでね、お話を作っちゃって、それをなんとか乗り越えてきたな、それもちょっと思ったんですね。だからそうやって、楽しきの中では、あまりこうゆったお話は、ひよっとしたらあまり生まれなかったのかなとか。ちょっと、苦しきとかっていうのは、それを乗り越えるための、いろんな妄想とか空想とかね、そういうこともあるのかなあ、なんて思ったんですね。と思ったという話です。

ほんとに今日、聞かせてもらって、楽しいとはいわないけど、なんかすごい自分の中でも考えられてよかったです。ありがとうございます。(拍手)

小田嶋一 苦しきから、これから新しい民話ができるのかもしれませんが。ていうことは、いままでできてきた民話も、そんなふうにも、もしかしてできてきたのかなと、思えます。

では、もう一方、どなたか…

参加者I (女性) —ありがとうございます。今日の話、すごく面白くて、最初『食わず女房』の話を知ったときに、なんかわたしは、この旦那さんも奥さんも、自分の心の中にある、自分ではコントロールしきれない欲望のお話なのかなって、思ったんです。だから、旦那さんも奥さんも、じつは一人の人間の中にあって、その欲望が「食べない嫁がほしい」し、嫁は「食べたい」しっていう、そういうなんか話に、わたしの中でなっていく、いったんですけど。

今日、いろんな話を聞いて、やっぱり、むかしの時代に、「食べれない」というのは単なる空腹ではなくて、イコール死に直結するんだっていう、そういう重いことを、非常に感じました。先ほどの小野先生の話で、摂食障害の話が出てきたんですけど、やっぱりそうゆう現代の病みたいなものも、やっぱりかぎりなく、すぐそこに死があるような感じがあって、だからその中で、妄想とか、お話とか、自分の想像力でそうゆうことを、乗り越えていくしかないんだなあという、そういう力を今日もらったような気がします。ありがとうございます。(拍手)

参加者J (女性) —わたしは、ご飯を食べられないっていうので、いま九十六歳になる、旅立つ準備をしている、わたしの母の言葉を思い出しました。それは、戦後まもなくだったと思うんですけど、八人兄弟の四番目の長男に嫁に行った母なんですけど、昼ごはんになると、ご飯を食べようと思うと、嫁に行ったその家の娘が、子どもをぞろぞろ連れてきて、ご飯を食べてしまうんですね。それでいざ自分が食べようとする、お米の中は空っぽなので、悲しくなって、「今日も食べられなかった。でもお義姉さんが来たからしょうがないんだ」って、思うのとっしょに、「おかあさんがもう少し、余計お米研いでくれたらいいのになあ」と思った日も、かなりあったということを、話していたのを思い出しました。

あと『食わず女房』の人が、お握りにして、どんどん、どんどん、頭の上に上げていったというのは、心が満たされなくて、旦那さんとのやりとりとか、そういうものがとても不満に思っていて、自分を元気にするために、一杯食べなくちゃなかったから、どんどん食べたんじゃないかなあとか、思われました。

やはり、いつの時代にあっても、自分を元気にする方法として、人それぞれ違うと思うんですけど、いつもお腹をすかせていた人であれば、そういうことはするんじゃないかなと思います。

やはり、このお話は現代にも続いていて、みなさんが生きていくうえで、心を元気にする方法というものは、人それぞれ違うと思いますが、やはり人間として生きていくときに、一番大事なものはなんであるか、ということ自分の心に問いかけるっていうか、そういうのを民話は教えてくれると思います。

それでもいつも、小野和子先生の話は、心の真ん中に語りかけてくださるので、わたしはとても大好きです。どうもありがとうございました。(拍手)

小田嶋—ありがとうございました。

小野—男の方からも意見が聞きたいね。

小田嶋—そうですね。

もしよろしかったら、男の方からも、なにかご意見がありましたなら…感想でもよろしいので。

参加者D (男性)—二回目になりますが、申し訳ない。

先ほど、異類婚姻譚の相手が、この『食わず女房』はなにか分からないというようなお話をさせていただいたんですけど、いま、さまざまなバリエーションの話があること、この場で初めて知りまして、たとえば『鬼打ち木の由来』の話であったりとか、ショウブやヨモギが関係していない話であったりとか、あと三匹の化け物の話であったりとか、いろんなバリエーションがあって、さらにやぐちやぐちやしているような気もするんですけど、もしかしたらこの話自体が、聞いた人がその相手、対象というのを考えることができる余地がある、ていうことが、もしかしてこの話が語り継がれてきた、大きな由来になっているのじゃないのかなあと、ちょっとこの場で感じました。

たとえば、いまいろんな方からの感想をおうかがいしていたんですけど、自分の境遇であったりとか、だれかのつらい話であったりとか、おじいさんおばあさんのころの話であったりとか、そういったつらかったことっていうのを、この話の『食わず女房』に投影して、それによって、自分なりに新しい民話のような形にして完成していくような、そういう他の民話の形ではあまりないような、そういう創造の余地が残っているということで、やっぱり残ってきたのかな、このお話は、ということを感じました。(拍手)

小田嶋—ありがとうございます。いいご意見をありがとうございます。

たしかにこの『食わず女房』の話って、なんかポツツと終わって、「あ、これで終わってしまうの？」って、結末がないようなお話なんですよ。だから、なんかそれは、現在のわれわれにも続いているから、そのまま終わってしまっって、いまでも、その鬼やへびがその辺にいて、やってくるのかもしれない、そういうお話なのかもしれないですね。ありがとうございます。

あと、どなたかいらっしゃいますか？

参加者A (女性)—すいません、わたしも二回目でございます、もうしわけございません。

いま、いろいろなバージョンの話があるっていうことを聞いて、だいたい大正末期から昭和初めくらいの話ではないかなと、勝手に想像しながら聞いていたんですが、ろくに食べられなかった時代、女性

がろくに食べられなかった時代っていうようなことで、いろいろなバージョンがあるという、西であれば蜘蛛、東であればなにか別なバージョンであるというようなことで。

尻切れトンボで終わっているという話は、この『食わず女房』に限らず結構、さきほど異形のもののお話ということで、からんで出てきましたが、妖怪が出てくるような話ってのは、「え、そこで終わり？」っていうような、結論がない話が結構多くて、「見たよ」って言って、「そこで終わり？」っていうような話が結構生まれたっていうように聞いております。

そういったことと合わせて考えると、この『食わず女房』の話、「おまんにちべろべろ、おまんにちべろべろ」っていう、そこだけどうも、強く印象に残ってるあたりを考えると、どうも口伝であることのないよりの証拠、あるいはいろいろ語る人によって考える余地があるという、地方によってもあるっていうようなことを、想起させるような話ではないかなということで、いろいろ深く考えさせられる話だと思いました。

もう一点いいですか？ 拒食症の高校生の話が出てきましたけれども、それが現代においてどうつながっていくかということ、あくまで感想として考えたことですが、むかしであれば口伝、口伝でしか、伝わる手段がなかったけれども、現代であれば、ちょっと前であれば深夜放送、投稿であるとか、もっと現代、私たちの時代に近くなると、ネットの書き込みであるとか、SNS であるとか、そういうところで類型的な話が広まっていくっていうようなあたりでまた、人々の新たな苦しみであるとか、悩みであるとか、そういうことが話として類型的にまた新しい話として伝わっていくのではないかなということ、いろいろと考えさせられる、今日はとても有意義な機会だったと思います。ありがとうございました。

小田嶋一ありがとうございました。

なんか、お話っていうのは、いま生まれているお話もあるし、むかし生まれて、そのままなんだか、ちゃんと形にならなかったまま、ずうっと続いてきたようなお話もあって、そんなのがかえってわれわれの心にひびいたりするんじゃないのかなあと、ふと思いました。

あと、ぜひ言っておきたい方…

参加者K（女性）—みなさん、いろんな角度から、民話を読んでらっしゃるということに感動したんですけど。わたしがこの話が聞いたときに、いちばんに頭に感じたこと、思われたことは、「いかに貧しかったか」ということです。そして男の方が、ものを食べない女房をね、欲しい、求めるという気持ちがね、「はあ、すごく貧しかったんだなあ、今とはだいぶ違うんだなあ」、そしてショウブの中に隠れて助かった男の方に対して、わたしね女の立場の問題っていうのも、非常にあると思いますけれども。世の中がすごく貧しくて、それを乗り切ってきた歴史のようなものね。

わたし、民話については、深く読めないタイプなんだろうと思うんですけど、そんなふうに考えます。それでみなさんが、いろんな角度から、女の生き方を思いやったり、いろんな事考えられますね。そのことについて、わたしすごくお勉強させていただいて、今日は参加させていただいて、ほんとにありがとうございました。どうもありがとうございます。

小田嶋一ありがとうございました。

もう一人の方…

参加者L（男性）—たいへんに内容があったと思います。

一言ですけどね、お握りをからっと並べたということ、理解ができないと思うんです。イタタタミというものがあったということ、考えればですね、カラッと並べて。お握りをカラッと並べるということは、当然そうしなければならなかったと思います。畳の上に、土間とかなんかにあったときに、板畳っていうのを敷いて、その上さお握りを並べたっていうふうに、わたしら子どものころから思っておって、その点については、わたしの方があってるんじゃないかなあと思いました。

小田嶋—あの、イタタタミ…というのは…？

小野—板戸のことだと思う。

小田嶋—あ、板戸のことですね？ あ、はい、ありがとうございます。板戸を敷いて、その上に並べたということですね？ ありがとうございます。

もう一方、いらっしゃいますか？

参加者E（女性）—日本の女性史の中でね、りっぱに外交官になったりした方もあって、そういうふうな方の本やなんかもいっぱい出てますね。立派な女性がこうゆうふうに、世界じゅうを羽ばたいて、リードしてきたっていう、民主主義の中でっていうこと、思うけれども。こうゆうふうな田舎で語る女性史というのは、こうゆう民話でないかなと思うんですね。それを語り継いでいくという使命をね、やっぱり私たちは、もう一度肝に銘じていったらいいかなと思います。

あとさきほど、島津さんが、異形のことをおっしゃいましたけれど、人間やっぱり、そういうふうな想像の世界、もしかして神さまだっているかもしれない、いないかもしれない。仏さまだって、いるかもしれない、いないかもしれない。いろいろこうゆうふうな情勢の中だけでも、たとえば、星空を見てね、七夕さまを思い出さない人はいないと思います。そうゆうふうね、異形の関わりっていうものをね、わたしは、とても大事ではないかと考えたのは、震災後です。わたしは山の方の、山の中の竹藪の中に引っ越して、ウグイスが下手な声で、たった一本後ろにある木に来て、ケキョ、ケキョ、て鳴いてるのね。「ああ、へたくそだこどお」って、私はそれ眺めるんです。それももう夏だっていうのに、まだケキョ。次の年、春早くに来て、ホーホケキョって、わたしが裏に出たのを見て、鳴いてくれたのね。それからわたし、なんとなく、ウグイスと仲良しになったようにして。ま、今年はどうだか…

わたしたちが、この自然の中におりますし、あと丸森町さんなんかね、こう訪ねたときに、もう体が、なんていうかこう、いろんなお話といっしょにその場所に立った時に、この場所でなきゃこのお話はないんだなという思いがある。だから、「そんな異形の昔話など嘘八（うそばち）だ」っていうような方もいるかもしれないんだけど、これ世界共通で、日本の昔話だって、グリム童話がこちらに来て成長したお話もあるようですし、これ、人間生来ている限り、異形の人と一緒にいていうわけじゃないけど、そうゆうものを感じながら、わたしたちは生きていかなきゃいけないんじゃないかなあと思うし、そうゆうものを感じた時、幸せになるんでないかなと思いがします。

今日はいいお話で、とてもうれしくなりました。ありがとうございました。（拍手）

小田嶋—ありがとうございました。

あの永浦誠喜さんのお話でね、鬼と人の間に生まれた子どもが、どちらにも入れないという、そうい

う世界をきっちりと分けてしまうようなお話も、一方でありながら、それと対峙するように、山の世界や海の世界と交わるお話というか、思いというの、お話の中に生まれてくるのかもしれないなあと思っています。

あと、ぜひなにか一つ、言っておきたい方ありますか。はい。

参加者J（女性）—先ほどもお話させていただいたんですけど、ヨモギとショウブのことについて、これは日本のすばらしいハーブなんですよ。それで、このことをこれから、わたしちょっと勉強して、自分の生活に役立てたいなと思いました。以上です。（拍手）

小田嶋—ありがとうございました。

そろそろ時間になってまいりましたので、もしぜひ言いたいことがある方がいれば、もう一方、二方、語ってもらってもいいんですが…よろしいですか…はい。

それではですね、きょうの「民話 ゆうわ座」、みなさん最初からいろんな、考えていること、示唆的なこと、問かけのこと、いろいろ出していただきまして、いろいろな意見が出て、考え合うことができたと思います。ほんとうに今日はありがとうございました。（拍手）

○閉会あいさつ

清水 チナツ（せんだいメディアテーク）

ありがとうございました。三時間と、とてもとても長いプログラムだったんですけども、ご来場いただいたみなさま、おつきあいいただきまして、ありがとうございました。

また、今日のこの場を支えて、引っ張ってきていただいた、みやぎ民話の会さんに、あらためて拍手をお願いします。（拍手）

それから、三時間分の対話の内容を、このように板書してくださった瀬尾さん、それから映像チームのN O O Kのみなさんも、どうもありがとうございました。（拍手）

今日上映させていただいたものも含めて、五名の語り手の方の全14本が二階の映像音響ライブラリーにございます。これはみやぎ民話の会さんが、先ほども少しお話がありましたが、物売りと間違われながら、「なにか売れるものないのか」と誤解をされながら、それでも一軒一軒訪ねて聞いてきてくださって、しかも聞けなかった日も多くあったと言いますが、それでも語り手の方々と膝を交えながら語っていただいた語りを、DVDにみなさんでまとめて、共有財産としてご紹介したいということで、ここまで届けてきてくださっています。ですので、ぜひみなさんも、今日の後半にありましたように、一話一話に向き合いながら、なにか自分自身が、物語から力を得ながら、生きるきっかけとして、このような民話という共有財産を生かしていければいいなと、思っていますので、ぜひ今後とも、どうぞよろしくをお願いします。今日は本当に、みなさん、ありがとうございました。

記録 小田嶋 利江（みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

—以上—